

関係節についての一考察 — Réflexions sur les propositions relatives —

1. はじめに

関係節はフランス語で *proposition relative*, 略して *relative* という。なぜ「節」(*proposition*) と呼ばれるのだろうか。

(1) 節 (*proposition*) とは何か

複文 (→ *phrase*) に含まれる、動詞を中心とする語群を言う。

J'ignore les raisons qui t'amènent. 君がどうしてここに来たかは知らない。

L'été venu, Paris est désert. 夏が来るとパリは寂しくなる。

Le chien aboyait, courait, s'arrêtait, repartait. 犬は吠えたり走ったり止まったり、また走ったりした。▶これらの文は動詞の数だけ節があるものと考えられる。

節の種類

① 独立節 等位文、並置文を構成する節のように、従属関係にない節

Nous n'avons pas pu sortir, car il pleuvait.

出かけられませんでした。というのは雨が降っていたからです。

② 主節と従属節 従位文において、構文上主位に立つ節を主節、従位接続詞によって主節に結ばれる節を従属節という。

Nous n'avons pas pu sortir, parce qu'il pleuvait. 雨が降っていたので出かけられませんでした。

一般には節を「判断の陳述」(*énoncé*)と定義し、(…) のように考えられた節は単文 (*phrase simple*) に等しい。

(朝倉季雄『新フランス文法事典』白水社、2002 ; *proposition* の項)

(2) 複文

単一の節からなる文を単文 (*phr. simple*)、2 つ以上の節からなる文を複文 (*phr. complexe*) とする。複文は節相互の構成関係に従い等位文 (*phr. de coordination*)、従位文 (*phr. de subordination*)、並置文 (*phr. de juxtaposition*) に分けられる。

(朝倉季雄『新フランス文法事典』白水社、2002 ; *phrase* の項)

(3) まとめ

文のタイプとしては、**単文**と**複文**がある。単文とは**主述関係** (*prédication*) を一つしか持たない文で、節イコール文 (*proposition = phrase*) である。複文は主述関係を二つ以上持つ文である。複文は次の三つの型に分けられる。

a. 等位文 : 二つ以上の節が等位接続詞 (*et, ou, car, donc, etc.*) によって結ばれているもの

Il s'est habillé et il est parti. 彼は服を着ると出かけた。

b. 従位文 : 主節にたいして従属関係にあるもの

Il faut y arriver avant qu'il ne fasse nuit. 夜になる前にそこに到着しなければ。

c. 並置文 : 二つ以上の節が接続詞なしに並置されているもの

Elle s'est tue ; elle était triste. 彼女は黙った。悲しかったのだ。

(4) 関係節 (proposition relative) は複文を形成する従属節の一種で、主述関係を持つ文でありながら、主節に従属するために「節」と呼ばれている。

(5) 従属節の種類

従属節は主節にたいして担う機能によって、次のように類型を立てることができる。

- a. 名詞節：節が大きな名詞として、主語、直接目的補語、間接目的補語、属詞などの役割を果たす。接続詞 *que, (à) ce que* などによって導かれることが多い。

Que la Terre soit ronde est hors de doute. 地球が丸いことは疑いない。〔主語〕

Je pense que ce projet est irréalisable.

私はこの計画は実行不可能だと思う。〔直接目的補語〕

Je prends garde à ce que tout soit prêt.

私はすべて準備が整っているよう気をつけます。〔間接目的補語〕

La vérité est que Pierre n'était pas content de son salaire.

ほんとうの所はピエールが給料に満足していなかったのだ。〔属詞〕

Il n'y a pas le moindre doute qu'il ait réussi.

彼が成功を収めたことに疑いの余地はない。〔名詞と同格〕

- b. 副詞節：従属節が主節にたいして、時・理由・条件などの状況補語の機能を果たす。

Je lirai ce livre quand j'aurai du temps. 時間がある時にこの本を読みます。〔時〕

Il a quitté la boîte parce qu'il n'était pas bien payé.

給料がよくなかったので彼は会社を辞めた。〔理由〕

Restez ici à moins qu'on ne vous appelle. 呼ばれないかぎりここに居てください。〔条件〕

- c. 形容詞節：従属節が主節に含まれる名詞を形容詞のように修飾する。関係節は形容詞節である。

Elle a caressé le chat qui dormait sur le sofa.

彼女はソファの上で眠っていた猫を撫でた。

(6) 文法機能としては、関係節は名詞を修飾し、属性・状態などを表すので、形容詞と同じ働きをする。形容詞には付加形容詞用法と属詞用法がある。

- a. *Il a lu un livre intéressant.* 彼はおもしろい本を読んだ。〔付加形容詞〕

- b. *Ce livre est intéressant.* この本はおもしろい。〔主語の属詞〕

- c. *Je trouve ce livre intéressant.* 私はこの本はおもしろいと思う。〔直接目的補語の属詞〕

関係節にも同じように、付加形容詞的用法と属詞用法がある。

- d. *Elle a acheté le tableau qui lui plaisait.* 彼女は気に入った絵を買った。〔付加形容詞〕

- e. *Il est là qui attend la réponse.* 彼はそこで返事を待っている。〔主語の間接属詞〕

- f. *Elle le sentait qui la suivait.* 彼女は彼が後を追って来るのを感じていた。〔直接目的補語の間接属詞〕

2. 関係代名詞とその文法的機能

(1) 関係代名詞は、先行詞が関係節においてどのような文法的機能を持つかに応じて次のように語形変化する。

文法的役割 先行詞	主 語	直接目的補語 属詞、状況補語	間接目的補語 その他の補語
人	qui	que (qu')	前置詞+ qui
物			前置詞+ lequel, etc.

※この表以外に *dont*、*quoi*、*lequel*、および関係副詞 *où* がある。

英語の関係代名詞と比較しながら、特徴を概観してみよう。

英語では先行詞が人か物かによって異なる語形が用いられるが、フランス語では間接目的補語・その他の補語を除いて、同じ語形を用いる。

文法的役割 先行詞	主 語	直接目的語	間接目的語 その他	所有格
人	who	who(m)	前置詞+ who(m)	whose
物	which	which	前置詞+ which	of which

※この表以外に関係副詞の *where*、*when*、*why* がある。

- ① 先行詞が物の所有格では **whose** も用いられる。

He mentioned a book *whose* title I can't remember.

彼はある本に言及したが、その題名を私は思い出せない。

- ② また英語には所有格を除いてすべての場合に用いることができる **that** がある。

I know a girl *who (that)* lives in London. 私はロンドンに住んでいる少女を知っている。

Where is the book *which (that)* you bought yesterday? 昨日君が買った本はどこにある?

ただし **that** は非制限的關係節では用いることができない。

He has two sons, {*who* /**that*} became teachers.

彼には二人息子がいるが、二人とも教師になった。

- ③ 直接目的格の *who(m)* / *which* / *that* は省略するのがふつうである。フランス語では関係代名詞を省略することはできない。

I read the book (*which*) you recommended me the other day.

私は君がこの間薦めてくれた本を読みました。

- ④ 〔間接目的語・その他〕では、前置詞は関係代名詞の前に置くこともできるが、関係節の末尾に残ることが多い（前置詞残留 *preposition stranding* という）。関係代名詞も省略するのがふつうである。

a. Bill is respected by the people *with whom* he works.

ビルはいっしょに働いている人たちから尊敬されている。

→ Bill is respected by the people \emptyset he works *with*.

b. This is the house *in which* Shakespeare was born.

これがシェークスピアが生まれた家です。

→ This is the house \emptyset Shakespeare was born *in*.

⑤ 所有格の *whose* はフランス語の *dont* の用法の一部と重なるが、次のようなちがいがあ
り注意が必要である。

(1) *whose* が代理する所有格が直接目的語のときは、所有格の付いた名詞は *whose* に引
きずられて前に出る。

This is the girl. Bill admires her eyes.

これがその少女です。ビルは彼女の目を褒めています。

→ This is the girl *whose eyes* Bill admires.

これがビルが目を褒めている少女です。

これにたいしてフランス語では直接目的語は元の位置に残る。

C'est la fille. Jean admire ses yeux.

→ C'est la fille *dont* Jean admire les yeux.

(2) 英語では *whose* を用いて関係節化すると元の文の所有形容詞は削除する。フランス
語では所有形容詞の代わりに定冠詞を付ける。

Il met a boy. His father is a pianist.

私は少年に出会った。彼の父親はピアニストだ。

→ I met a boy *whose father* is a pianist.

私は父親がピアニストをしている少年に出会った。

J'ai rencontré un garçon. Son père est pianiste.

→ J'ai rencontré un garçon *dont le père* est pianiste.

【考察】なぜ英語の *whose* とフランス語の *dont* には上のようないちがいがあ
るのだろうか。

whose は冠詞や所有形容詞と範列をなす名詞の限定詞だと考えられる。

a	}	book	un	}	livre
the			le		
his / her			son		
this			ce		
whose			*dont		

このため *whose* を用いるともう席がふさがってしまい他の限定詞は排除される。また〈限
定詞＋名詞〉は一つの塊 (=構成素 *constituent*) を作るので、*whose* が前置されると名詞も
いっしょに移動する。

これにたいしてフランス語の *dont* は *de qui / duquel* と同じ価値を持つ前置詞句相当表現
であり、限定詞ではない。このため英語のように名詞といっしょに移動したり、限定詞を
排除したりしないのである。

⑥ 英語では先行詞が「場所」であれば関係副詞 *where* を、「時」であれば *when* を、「理
由」であれば *why* を用いる。

a. This is the office *where* Mary works. ここがメアリーが働いている会社です。

b. I remember the day *when* I met him for the first time.

私は初めて彼に会った日のことを覚えている。

c. I don't know the reason *why* he quitted his job.

私は彼が仕事を辞めた理由を知らない。

フランス語では関係副詞は *où* 一つで、先行詞が場所のときも時のときも用いる。

d. C'est la ville *où* Nerval est né.

これがネルヴァルが生まれた町です。

e. Au moment *où* je sortais, le téléphone a sonné.

私が出かけようとしていた時に電話が鳴った。

理由には *pour laquelle* を用いる。

f. J'ignore la raison *pour laquelle* il a quitté la boîte.

私は彼が会社を辞めた理由を知らない。

(2) 教えられることが少ない *que* の用法 (1): 先行詞が関係節の主語の属詞

a. Tu n'es plus celui *que* tu étais.

あなたはもう昔のあなたではありません。

b. Les temps ne sont plus ce *qu'ils* étaient.

時代が昔とはちがうのだ。

c. Elle les a rassurés sans difficulté, en gentille fourbe *qu'elle* était.

親切めかした偽善的女性にふさわしく、難なく彼らを安心させた。

d. Ingrat *que* je suis, je t'inquiète à chaque instant.

ぼくは恩知らずだから、いつも君に心配をかけるんだね。

(朝倉季雄『新フランス文法事典』白水社、2002)

e. Personne ne vient plus voir le vieillard *que* je suis.

老人の私にはもうだれも会いに来ない。

f. Vous êtes aujourd'hui ce *que* j'étais autrefois.

今のあなたは昔の私と同じだ。

(目黒士門『現代フランス広文典』白水社、2015)

【考察】

Il n'est plus l'homme *qu'il* était. 「彼はもう昔の彼ではない」を例に考えよう。この文を分解すると次のようになる。先行詞 l'homme は主節の主語の属詞であると同時に、関係節内でも主語の属詞である。これを[A]と記号化する。

i) 主節 Il n'est plus [A]. 彼はもう A ではない。

ii) 関係節 Il était [A]. 彼は昔は A だった。

つまり「彼は昔は[A]だったが、今は[A]ではない」という意味である。このとき先行詞 l'homme は属性を表す非指示的名詞句である。

N. B. 非指示的名詞句とは、*Claire est étudiante.* のように属性・性質(内包)を表して、指す対象(外延)がない名詞句のことをいう。

先行詞が指示代名詞のこともある。この場合も、指示代名詞 *celui, ce* は属性を表しており、

非指示的だと考えられる。

a. Il n'est plus {celui / ce} *qu'*il était. 彼はもう昔の彼ではない。

ところが目黒の挙げている次の例ではそうではない。

b. Personne ne vient plus voir le vieillard *que* je suis.

老人の私にはもうだれも会いに来ない。

先行詞 *le vieillard* は関係節内では主語の属詞であり、非指示的名詞句である。(独立節では *Je suis un vieillard.*の方が自然だが、ここではそのことは問わない)

ところが主節では *le vieillard* は *voir* 「会う」の直接目的補語であり属詞ではない。*voir* は非指示的名詞句を目的語とすることはできないので、*le vieillard* は主節では指示的名詞句と考えざるを得ない。すると先行詞 *le vieillard* は、主節では指示的で関係節では非指示的という二重の性質を示すことになる。これは大きな謎である。

【参考】

英語では主格補語 (=フランス語の属詞) を先行詞とする制限的關係節は次のようになる。用いる関係代名詞は *that* のみで、*what* を使うこともある。

a. She is no more the good teacher (*that*) she used to be.

彼女はもう昔のようないい教師ではない。

b. He is not what he was. 彼は昔の彼ではない。

英語では先行詞も非指示的でなくてはならないとする人もいる。

c. John finally {became / *saw } the doctor *that* we had wanted Sue to be.

ジョンはついに私たちがスーにそうあってほしいと願っていた医者になつた / *会つた}。

(Emonds, J. E., *A Unified Theory of Syntactic Categories*, Foris, 1985)

ところが先行詞が指示的な次のような例もある。

d. I remembered the pretty girl *that* Mary used to be.

私は昔のメアリーがそうだった可愛い女の子を思い出した。

(Hawkins, J. A., *Definiteness and Indefiniteness: A Study in Reference and Grammaticality Prediction*, Croom Helm, 1978)

ただし主節の動詞に制約があり、remember, imagine, want など、記憶・想像・願望を表す動詞でなくてはならないようだ。

e. He wanted to marry the woman *that* his mother used to be.

彼は自分の母親がそうだったような女性と結婚したいと思っている。

(中島平三編『最新英語構文事典』大修館書店、2001)

N. B. 動詞の制約を見ると、メンタル・スペース流の解決法が考えられそうだが、ここではこれ以上立ち入らない。

(3) 教えられることが少ない *que* の用法 (2): 先行詞が関係節の状況補語の場合

a. Au bout des onze jours *qu'*a duré cette instruction... [時]

この予審が 11 か月続いた後で

b. les trois kilomètres *qu'*il a couru 彼が走った 3 キロメートル [距離・目方・価格]

→同様にして *coûter*, *peser*. 実際にはほとんど用いられない。

cf. les trois mille francs *que* ce meuble m'a coûté この家具に払った 3000 フラン

(朝倉季雄『新フランス文法事典』白水社、2002)

c. Tu te souviens de l'hiver *qu'*il a fait si froid ?

あのとても寒かった冬を覚えていますか。

d. Du train *que* vont les choses, on arrivera bientôt à l'accord.

この調子でいくと、まもなく意見の一致を見るだろう。

(目黒士門『現代フランス広文典』白水社、2015)

f. [時間]

du temps *qu'*elle était jeune 彼女が若かった頃

dernière fois *que* je l'ai rencontré 最後に彼に出会った時

deux heures *que* j'ai travaillé 私が仕事をした 2 時間

(『ロワイヤル仏和中辞典』旺文社)

g. [距離・価格・重量など]

dix kilomètres *qu'*il a marché 彼が歩いた 10 キロメートル

cinquante francs *que* m'a coûté cette robe このドレスに払った 500 フラン

(ibid.)

h. Un matin *que* l'heure où Marthe entrerait d'ordinaire dans le cabinet de Charles était passée...

ふだんマルトがシャルルの書斎に入っていく時刻をとうに過ぎたある朝のこと...

i. maintenant, à présent, aujourd'hui とともに

Maintenant *que* le temps s'est remis au beau, nous allons pouvoir sortir.

天気はまた良くなって来た今なら外出できるだろう。

h. voilà, il y a, ça fait... とともに

Cela fait bientôt neuf mois *qu'*il est là-bas.

彼があそこに住み始めて間もなく 9 ヶ月になる。

(Grevisse, M., A. Goosse, *Le Bon usage*, 12^e édition, Duculot, 1991)

(4) 番外編の関係代名詞 *quoi*

que の強勢形。いつも前置詞と共に用いられる。人物・事物を先行詞とする古典語法は 18 世紀初頭に禁止され、中性代名詞または観念（前文の代理）にのみ代わり得ることが定められた。古典語法は現代文章語で復活した。

I. 先行詞と共に

1. 先行詞=中性代名詞 (*ce, rien, quelque chose, autre chose, 疑問詞 que* など)

Voilà *ce à quoi* je pense.

それが私の考えていることだ。

Il y a autre chose aussi à *quoi* je tiens.

ぼくが執着している別のこともある。

2. 先行詞=節、またはそれに含まれる観念

Ainsi quelques minutes s'écoulèrent rapidement, après *quoi* une servante vint annoncer que le repas était servi.

かくして、またたく間に数分が過ぎ去った。そのあとで、女中が食事の用意ができたと知らせに来た。

3. 先行詞=名詞

① 中性語に準じる名詞 ((une, quelque) chose, des choses, la seule chose, un point など)

Ce n'est pas une chose à *quoi* vous pouvez trouver à redire.

あなたに文句をつけられるようなことはありません。

② 事物名詞

Certes le mot Ennui est bien faible pour exprimer ces détresses intolérables à *quoi* je fus sujet de tout temps.

確かに倦怠という語は私がいつも陥るこの堪え難い苦悩を言い表すには弱すぎる。

II. 先行詞なしで

1. c'est, voilà, voici の後で

C'est en *quoi* vous vous trompez. その点あなたはまちがっている。

2. de quoi + 不定詞

Il n'y a pas de *quoi* rire. 笑うことはない。

不定詞を省略して

Il n'y a pas de *quoi*. どういたしまして。

(朝倉季雄『新フランス文法事典』白水社、2002)

(5) 主格として用いられる *lequel, laquelle* (非制限節にしか用いない)

官公庁文体・法律文のほか、文学的にまれに用いられる。

① 先行詞を明示するため

Nous étions invités à passer le week-end chez la sœur de Luc, *laquelle* était la mère de Bertrand.

私たちは L の姉の家で週末を過ごすように招待されていたが、その姉というのは B の母であった。※*qui* だと先行詞が *la sœur de Luc* なのか *Luc* なのか曖昧になる。

② *qui* の反復を避けるため

C'était d'abord Marthe, leur aînée, qui avait épousé Auguste Laboque, et qui en avait eu Adolphe, *lequel* s'était marié avec Germaine.

まず彼らの姉 M が L と結婚して彼との間に A をもうけ、その A は G と結婚した。

③ 関係代名詞を強調するため

La lettre était déposée dans un coffret clos, *lequel* se dissimulait dans la mousse.

手紙は鍵のかかった小箱に入れてあったが、その箱は苔の中に隠れていた。

(朝倉季雄『新フランス文法事典』白水社、2002)

3. 関係節のタイプ — 制限的關係節と非制限的關係節をめぐって

関係節はその働きに応じて制限的關係節 (relative restrictive) と非制限的關係節 (relative non-restrictive) の区別を設けるのがふつうである。制限的關係節は限定的關係節 (relative déterminative) と呼ばれることもあり、非制限的關係節は同格的關係節 (relative appositive)、

説明的関係節 (relative explicative) と呼ばれることもある。

(1) 形容詞的機能を持つ関係節はある時は限定的、ある時は説明 (同格) 的である。限定的関係節 (prop. rel. déterminative [restrictive]) は先行詞の表す人・物を同種の他の人・物と区別してそれに限定を加え、文意に不可欠なもの。これに反し、説明 (同格) 的關係節 (prop. rel. explicative [appositive]) は先行詞に付随的観念を添えるにすぎないから、これを省略することができる。

Les soldats qui ne s'étaient pas sauvés, furent faits prisonniers.

逃げなかった兵士は捕虜にされた (限定的)

Les soldats, qui ne s'étaient pas sauvés, furent faits prisonniers.

兵士たちは逃げなかったから捕虜にされた。(説明 (同格) 的)

(朝倉季雄『新フランス文法事典』白水社、2002)

【解説】

上の1つ目の文の制限的關係節は、先行詞の *les soldats* を「逃げた兵士」と「逃げなかった兵士」の二つの集合に分ける働きがある。捕虜にされたのは「逃げなかった兵士」だけである。このように制限的關係節は先行詞の表す集合を「制限」「限定」するのでそのように呼ばれている。これにたいして2つ目の非制限的關係節は、先行詞 *les soldats* の集合全体に同格的にかかる。逃げなかったのは兵士全員である。

(2) 英語の場合

關係節には、二つの用法がある。

a. He has two sons who became teachers.

彼には教師になった息子が二人いる。

b. He has two sons, who became teachers.

彼には息子が二人いるが、二人とも教師になった。

a.は教師になった二人のほかにも、息子がいるという含みがある。一方、b.は、「息子が二人いて、その二人が教師になった」という意味だから、息子は二人しかいないことがわかる。a.のように、先行詞の意味を限定する關係詞の用法を制限用法 (restrictive use) と言い、b.のように、先行詞について追加的な説明をする用法を非制限用法 (non-restrictive use) と言う。(安藤貞雄『現代英文法講義』開拓社、2005)

(3) 考察

英語の解説とフランス語の解説はほぼ同じことを述べていて、次の二点に要約できる。

- ① 制限的關係節は先行詞の範囲(外延)を限定するが、非制限的關係節にその働きはなく、追加的な属性を加えるだけである。
- ② 非制限的關係節を削除しても文意は損なわれないが、制限的關係節を削除すると元の文とはちがう意味になってしまう。

a. Les étudiants qui ont raté l'examen doivent redoubler. [制限的]

試験に落ちた学生は留年しなくてはならない。

→制限的關係節は先行詞 *les étudiants* の集合に限定を加え、「試験に落ちた学生」という部分集合を形成する。留年しなくてはならないのは試験に落ちた学生だけで、受か

った学生は留年することはない。関係節を削除すると次のようになり、文脈によって形成された学生の集合全体が留年の対象になることになり、文の意味は大きく変わる。

b. Les étudiants doivent redoubler.

学生たちは留年しなくてはならない。

非制限的關係節では事情は異なる。非制限的關係節は先行詞 *les étudiants* が表す集合を限定しない。次の文では文脈によって形成された集合に属する学生は、全員試験に落ちたことになる。

c. Les étudiants, qui ont raté l'examen, doivent redoubler. [非制限的]

学生たちは試験に落ちたので留年しなくてはならない。

したがって関係節を削除しても文の意味は変わらない。

d. Les étudiants doivent redoubler.

学生たちは留年しなくてはならない。

(4) 非制限的關係節の特徴 (フランス語の場合)

説明 [同格] 的關係節は先行詞との間に休止を置いてやや低い音調で発音される。この休止は多く (,) で表す。先行詞が固有名詞、〈指示 [所有] 形容詞 + 名詞〉、人称代名詞のように特定のものを表すときは、関係節は一般に説明 [同格] 的。

(朝倉季雄『新フランス文法事典』白水社、2002)

(5) 非制限的關係節の特徴 (英語の場合)

制限用法の場合は、先行詞と関係詞の間に休止 (pause) はないが、非制限的用法の場合は、先行詞のあとに休止が置かれる。[書き言葉では、コンマが付けられる]

内在的に「定」(+def.)である固有名詞や人称代名詞を制限用法の先行詞にすることはできない。

i) *John, whom you saw in town, is a good friend of mine.*

街でジョンと会ったそうだが、彼はぼくの旧友なんだ。

ii) **John that you saw in town is a good friend of mine.*

iii) *Paris, which I love, is a beautiful city.*

パリは、私は大好きですが、美しい都市ですよ。

iv) * *Paris which I love is a beautiful city.*

しかし固有名詞に *the* と限定詞が付いた場合は、文法的になる。

v) *The Paris which I love is a beautiful city.*

私の大好きなパリは美しい都市です。

v)が文法的なのは、パリという都市の一局面 (aspect) を示すものとして普通名詞的に用いられているからである。(安藤貞雄『現代英文法講義』開拓社、2005)

(6) 考察

フランス語も英語も非制限的關係節についてほぼ同じ解説をしている。しかしどちらも事実を記述しているだけで、次のような問に答えていない。

【疑問その1】

なぜ非制限的關係節では、先行詞と関係詞の間に休止があり、コンマを打つのだろうか。

逆になぜ制限的關係節では休止がないのだろうか。休止の有無はどのようなことを表しているのだろうか。

【疑問その 2】

固有名詞、人称代名詞、〈指示形容詞・所有形容詞＋名詞〉など文法的に定 (*défini*) である名詞句を先行詞として制限的關係節を作ることができないのはなぜだろうか。

【疑問その 3】

定冠詞付き名詞句は文法的に定 (*défini*) だが制限的關係節を作れる。これはなぜだろうか。

a. *Le garçon qui parle avec le professeur est le neveu de Marie.*

先生と話している男の子はマリーの甥だ。

b. *La dame que vous demandez n'est plus ici.*

あなたがお尋ねのご婦人はもうここにはいません。

【疑問その 4】

朝倉も安藤も制限的關係節を作れない先行詞のなかに人称代名詞を含めているが、実例を挙げていない。次のようなものがその例だと考えられる。

〔主語の間接属詞〕

Il est là qui attend la réponse. 彼はそこで返事を待っている。

〔直接目的語の間接属詞〕

Je l'ai entendue qui le disait à un de ses amis.

友達の一人に彼女がそう言っているのを聞いたのです。

(朝倉季雄『新フランス文法事典』白水社、2002)

朝倉はこれが制限的なのか非制限的なのか述べていない。一方、目黒 (2015) は制限的でも非制限的でもないものとして、属詞的關係節を挙げている。

Il est là-bas qui joue au tennis. 彼はあそこでテニスをしている。

Le voilà qui se met en colère. ほら彼が怒り出した。

また次のような例も加えることができる。

Il est déjà dix heures et moi qui ne suis pas encore prêt !

もう 10 時だというのに私はまだ仕度ができていない。

(7) 【疑問その 1】 について

説明的關係節は、その形式からいえば従属節であって、文の一要素を修飾しているに過ぎないが、その本質は文全体に対して等位節の關係にあるのである。そのことは、すなわち、この種の形容詞節は独立の文としての音調をもちうることを意味する。句読法において、説明的形容詞節は、他と (,) によって切り離されることが多いが、本質的にそれ以上に重要なことは、この形容詞節は発音の際に前後に休止が生じ、かつ、その休止に挿まれた部分が独立文としての音調をもつことである。以上のことは、次の文例から明瞭に読み取ることができる。

(1) *C'était une petite bourse brodée, qu'il baisa.*

それは刺繍した小さな財布だった、そして彼はそれに接吻した。

ここで *qu'il baisa* は容易に *et il la baisa* と等位節に書き改めることが出来、かつ、*qu'il baisa* の時も、*et il la baisa* のときも同じ音調を描く。(…)

こうして説明的形容詞節は独立文の音調をもつゆえに、そこでは独立文におけると同じように願望の言表態度が接続法の使用によって表されうる。そのような可能性は、限定的形容詞節には存在しない。

- (1) *Cette disposition n'est sans doute pas celle de mon cher frère Pierre Costals, que le Diable emporte.* そのような心持ちはおそらくわれらの同僚ピエール・コスタルのそれではない、
— 悪魔がああ男を掠っていってくれればよい。
(川本茂雄『フランス語統辞法』白水社、1982)

【考察】

川本は、非制限的關係節は容易に等位節に書き換えることができ、独立文と同じ音調を持つと指摘している。つまり非制限的關係節は従属節のような形式を取りながらも、限りなく独立文に近い性質があるということである。ここから非制限的關係節は、主節とは独立した命題を形成することができ、主節とは別の断定 (*assertion*) を表すことができるといふ予測が導ける。独立文の音調と休止は、非制限的關係節が独立の断定を担いであることを音声的に表している。

一方、制限的關係節は先行詞と修飾関係 (限定関係) によって強く結合しており、独立した断定を表すことができない。だから休止もないのである。

〔制限的關係節〕

J'ai vu le film que tu m'avais recommandé. 私は君が薦めてくれた映画を観た。

└──────────────────┘
一つの断定

〔非制限的關係節〕

Nous avons visité le château de Chambord, qui a été construit pour François I^{er}.

└──────────────────┘ └──────────────────┘
断定(1) 断定(2)

私たちはシャンボール城を訪れたが、この城はフランソワ 1 世のために建てられたものだ。

(8) 【疑問その 2】 について

例としてあげられることが多いのは固有名詞である。

〔記述例〕

- (2) *Vial, qui essuyait ses mains tachées,* regardait Hélène.

ヴィアルは汚れた手を拭いていたが、エレヌを眺めやった。

- (3) *C'étaient les paroles qui pouvaient le mieux l'apaiser.*

それは彼女の心をもっとも良く静めることのできる言葉だった。

(2)においては、*Vial* なる人物は特定の間人であって、それ以上に限定することをふつうは必要としない。「手を拭いているヴィアル」とその他のヴィアルを区別し、限定する必要は一般には感ぜられない。したがって、この場合の形容詞節はそっくり取り除いても、理解は根本的に妨げられない。これに反し、(3)においては、形容詞節は先行詞を限定していて、

「彼女の心をもっともよく静めることのできる言葉」を、そうゆう力のない言葉から区別し、限定している。 (川本茂雄『フランス語統辞法』白水社、1982)

【考察】

川本の説明を敷衍すると次のような原則を導くことができる。

[原則]

固有名詞のように、語用論的知識に基づいてその指示対象が唯一的に同定できる場合は、それ以上限定することができないため、制限的關係節を付けることができない。一方、非制限的關係節は先行詞を限定せず、付加的属性を付け加えるだけなので、固有名詞を先行詞とすることができる。

(9) 〈所有形容詞・指示形容詞＋名詞〉の場合

固有名詞はよいとして、所有形容詞・指示形容詞の付いた名詞の場合はどうだろうか。これらも文法的には固有名詞と同じく「定」(défini)である。

所有形容詞付き先行詞に制限的關係節が付いた文例は少ないが、探すと次のような用例が見つかる。

a. Comment soulager **mon chien** qui vomit en voiture ? (Internet)

車の中で吐く私の犬をどうすればいいでしょうか。

b. Comment retrouver **mon chien ou mon chat** qui a fugué ? (Internet)

逃げ出したうちの犬や猫をどうやって見つければいいでしょうか。

c. Lettes à **votres fils** qui en a ras le bol (Paul Guth の小説の題名)

うんざりしているあなたの息子への手紙

d. Elle doit détruire **sa maison** qui fait de l'ombre à son voisin. (Internet)

彼女は隣家を日陰にしている自宅を取り壊さなくてはならない。

e. Dans **sa chambre personnelle** dont la vue reposante donnait sur les jardins, elle avait trouvé, la veille en arrivant, une corbeille de fleurs accompagnée d'un mot de bienvenue.

(Arley, C., *La femme de paille*)

窓から落ち着いた庭の眺めが見える自分の部屋で、彼女は前日に到着した時に、花籠と添えられた歓迎のカードを見つけていた。

指示形容詞付きの例もある。

f. Tu crois vraiment qu'avec Twitter et facebook une sorcière qui fasse quoi que ce soit ne serait pas filmée et transformée en... spectacle viral, comme **ce chien** qui dit "Je t'aime". (Internet)

君は本当に、ツイッターやフェイスブックで、何かをする魔女が映像に撮られて、ウィルスのように広まる画像に変えられるなんてことはないと思っているのかい。「好きだよ」と言葉を話すこの犬みたいにね。

g. Ça m'a pris une heure pour arriver ici dans **ce train** qui puait. (Internet)

臭いこの電車に乗ってここまで来るのに1時間かかったよ。

h. **Ce train** qui s'en va. (歌の題名) 去りゆく列車

i. ***Cette voiture qui conduira un jour mieux que vous.*** (Le Figaro 誌の記事タイトル)

いつかあなたより上手に運転するこの車 (自動運転についての記事)

〔注〕例 i. の *cette voiture* は、*Ces Français qui consomment trop de médicaments*. 「薬を乱用するフランス人」と同じように、特定の車ではなくあるタイプの車を指す総称用法の指示形容詞である。

j. Je montre à mon père ***cette lettre que je viens de recevoir.***

私は受け取ったばかりのこの手紙を父に見せます。

(春木仁孝他『新・フランス語文法』朝日出版社)

k. Beaucoup de gens redoutaient l'aventure, la niaient, l'ignoraient ou ne la souhaitaient pas.

Le désir de gagner n'était pas en cause, mais leur tranquillité, cet ersatz de bonheur pour éviter les grandes passions, les faillites et les risques, surtout les risques, ***ces bancos improbables où l'on pouvait laisser des lambeaux de son cœur, de ses rêves et de ses illusions.***

(Arley, C., *La femme de paille*)

多くの人は冒険を嫌う。冒険を否定し、無視し、あるいは望まない。勝ち負けが問題なのではない。そういう人たちは平穏な暮らしが大事なのだ。それが幸福の代用品となり、愛や憎しみなどの激しい感情や失敗やリスクを避けられる。とりわけリスクだ。それはまるで自分の心の一部や夢の切れ端や幻想を失うかもしれないあり得ないカードゲームのようだ。

【考察】

文法書には、〈指示形容詞＋名詞〉や〈所有形容詞＋名詞〉は制限的關係節の先行詞になれないと書かれているが、探してみると用例があるので、文法書の記述は間違っていると考えられる。

固有名詞は意味論では固定指示子(*rigid designator*)と呼ばれている。その意味は、あらゆる状況・場面および可能世界において、同一の指示対象を指すということである。Mozart はどんな状況でもあのモーツァルトを指す。

ところが指示形容詞・所有形容詞付き名詞句は事情が異なる。指示形容詞付き名詞は、文脈・状況によって異なる対象を指すので固定指示的ではない。

a. [指差して] Tu as lu *ce livre*? この本、読んだかい。[現場指示]

b. J'ai lu un livre intéressant. *Ce livre* a été écrit par un célèbre physicien.

私はおもしろい本を読んだ。その本は有名な物理学者が書いたものだ。[文脈指示]

c. Il y avait sur la cheminée, entre les candélabres, deux de *ces grandes coquilles roses* où l'on entend le bruit de la mer quand on les applique à son oreille. (Flaubert, *Madame Bovary*)

マントルピースには燭台に挟まれて、耳に押し当てると海の音が聞こえるというあの桃色の大きな貝殻があった。[記憶指示]

このように指示形容詞付き名詞は、固有名詞のように固定指示的ではなく、文脈・状況によって異なる対象を指すので、制限的關係節によって限定を受けることが可能である。つまり固有名詞も指示形容詞付き名詞も「定」ではあるのだが、「定」の性質が異なる。

所有形容詞付き名詞の場合も、たとえば *mon chien* 「うちの犬」は私との所有関係によって対象の同定を助けているだけであり、固定指示的ではない。次の例の *sa petite amie* は次々

と異なる人を指すことができる。

- d. *Sa petite amie est toujours différente. Hier, c'était une Italienne et aujourd'hui, c'est une Suédoise.* 彼のガールフレンドはしょっちゅう入れ替わる。昨日はイタリア人だと思ったら、今日はスウェーデン人という具合だ。

(10) 【疑問その3】について

指示形容詞や所有形容詞について述べたことは、定冠詞にはさらに当てはまる。定冠詞付き名詞は、固有名詞のように固定指示的ではなく、文脈・状況によって異なる対象を指すことができる。

- a. *Fermez la porte.* ドアを閉めて。〔現場指示〕
 b. *Elle a acheté un sandwich et du lait. Elle a mangé le sandwich tout de suite.* 〔文脈指示〕
 彼女はサンドイッチとミルクを買った。彼女はサンドイッチをすぐに食べた。
 c. *Le président a décrété l'état de siège.* 大統領は戒厳令を発令した。〔記憶指示〕

たとえば *Prenez l'ascenseur.* 「エレベーターに乗ってください」では、*l'ascenseur* の指示対象を十分に同定しているわけではないので、*Prenez l'ascenseur qui est derrière vous.* 「後ろにあるエレベーターに乗ってください」のように関係節でさらに限定することができる。

(11) 【疑問その4】について

人称代名詞も文法的には定 (*défini*) と考えられるが、関係節が付く例がある。人称代名詞は固有名詞のように固定指示的ではないが、発話行為によってその指示対象が決定され、その都度特定の人・物を指すので、それ以上限定を受ける余地はないように思われる。

- a. *Il est là qui nous attend.* 彼があそこで私たちを待っている。〔主語の間接属詞〕
 b. *Je l'ai vue qui courait à toute vitesse.* 〔直接目的補語の間接属詞〕
 彼女が全速力で走っているのを見た。

- c. *Vous qui connaissez très bien M. Charles, pourriez-vous me le présenter ?*

あなたはシャルルさんをよくご存じですから、私に紹介してくれませんか。

(c.は『フランス語法辞典』大修館書店、1975 より)

- d. *Moi qui croyais qu'elle m'aimait !* 彼女は私を愛していると思っていたのに。

- e. *Vous qui êtes un modèle de sainteté*

Vous qui avez servi de trône à la Sagesse divine

Vous qui êtes la source de notre joie (...)

聖なるものの模範であるあなた

聖なる叡智の玉座となったあなた

私たちの喜びの源泉であるあなた

(Thomas a Kempis, *L'imitation de Jésus-Christ*, 原文はラテン語)

これらの例についてはいくつか考え方があがる。

- ① 制限的と非制限的という二分法がまちがっていて、関係節が先行詞を限定する度合いには強弱があり段階的である。だから人称代名詞に関係節が付くのは不思議ではない。
- ② *vous* 「あなた」にもいろいろな側面があると考えれば、*vous* に付く関係節は「あなた」の一側面を限定しているとも考えることができる。固有名詞の場合は、*le Paris du XVIII^e*

siècle「18世紀のパリ」のように、一側面であることを示すために定冠詞が付くが、人称代名詞には定冠詞が付かないだけのことである。

- ③ 人称代名詞に関係節が付くタイプは、従来の制限的 vs. 非制限的という二分法から外れる第三の関係節のタイプであると考えべき（擬似関係節：例 a, b, d）

(12) さらなる疑問

a. Les Danois ont été **les premiers Européens** qui aient mis les pieds en Amérique.

デンマーク人がアメリカに上陸した最初のヨーロッパ人だ。

（『フランス語法辞典』大修館書店、1975）

b. Il est **le seul dans la classe** qui pourrait répondre à toutes les questions en trente minutes.

30分間ですべての質問に答えられるのはクラスで彼ひとりだ。（同書）

この例はどちらも制限的關係節だと考えられる。すると a.では先行詞 *les premiers Européens* が表す集合の範囲を關係節が限定しているということになるが、「最初のヨーロッパ人のうちでアメリカに上陸した人」という部分集合を作っているわけではない。b.では先行詞 *le seul* 「ただひとりの人」の集合を「30分間ですべての質問に答えられる」という關係節が限定していると考えるのはナンセンスである。ではこの關係節とどのような働きをしているのだろうか。

（注）これは *Il y a beaucoup d'Américains qui aiment l'opéra.* 「アメリカ人の中にはオペラ好きが多い」と同じく存在文（あるいは存在文に準じる文）に付く關係節で、ふつうの制限的關係節とは異なる働きをすることが知られている。これについては機会があればさらに考察することにして、ここではこれ以上触れない。

4. 先行詞の問題

(1) 關係代名詞の先行詞となる名詞は、冠詞などの限定詞で限定されていなければならない。従って、次の場合の名詞は先行詞となることができない。

- ① 名詞グループの中の無冠詞名詞

J'ai planté le noyau de *pêche* que tu as mangé hier. [誤]

私はきのう君が食べたモモの種を植えた。

J'ai planté le noyau de la pêche que tu as mangée hier. [正]

- ② 動詞句の中の無冠詞名詞

Il demandait *justice*, qui ne lui a pas été faite. [誤]

彼は正当な裁きを求めていたが、叶えられなかった。

この文は別の言い換えが必要である。たとえば

Il demandait *justice*, mais il n'a rien obtenu. [正]

彼は正当な裁きを求めていたが、何も得られなかった。

- ③ 副詞句を作る無冠詞名詞

Il parla *san colère*, à laquelle il n'était d'ailleurs pas enclin. [誤]

彼は怒らずに話した。もっとも彼は怒りっぽくはなかったのだが。

この文も別の言い換えが必要である。たとえば

Il parla sans *colère*, passion à laquelle il n'était d'ailleurs pas enclin. [正]

彼は怒らずに話した。もともと彼は怒りの情に流されやすくはなかったが。

(注) 無冠詞名詞でも、限定された意味を持っていれば先行詞となり得る。

Il est coupable de *crimes* qui méritent de châtiments.

彼は懲罰に値する罪を犯した。(crimes の不定冠詞 des の省略)

Il agit en *politique* qui sait gouverner

彼は統治を心得た政治家として行動している。(en の後での定冠詞の省略)

(目黒士門『現代フランス広文典』白水社、2015)

(2) 部分的意味を示す名詞は、総称的説明を与える関係節の先行詞となることはできない。

Il a acheté *du pain*, qui est la nourriture principale des pauvres. [誤]

彼は貧しい人々の主食であるパンを買った。

Il a acheté *du pain*, nourriture principale des pauvres. [正]

(同書)

(3) 考察

目黒ははっきりと述べてはいないが、「先行詞が冠詞などによって限定されていなければならぬ」という原則は、制限節にも非制限節にも等しく当てはまるようである。なぜこのような原則があるのだろうか。

制限節については次のように考えることができる。すでに述べたように、制限節は先行詞の表す集合の範囲を限定するものである。les étudiants qui ont suivi ce cours 「この講義を受講した学生」では、les étudiants 「学生」の集合を狭めて部分集合を作っている。名詞句の表す集合とは外延 (extension) のことであり、名詞が外延を持つためには冠詞などによって現働化 (actualisation) されていなくてはならない。無冠詞名詞は現働化されていないため、外延を持たない。このために制限節を付けることができないのである。

たとえば属詞位置の職業・身分名詞はふつう無冠詞で用いられ、非指示的である。

a. **Jean est étudiant.** ジャンは学生だ。

属詞の無冠詞名詞に關係節を付けることはできない。

b. ***Jean est étudiant qui travaille bien.** ジャンはよくできる学生だ。

關係節を付けるには属詞に冠詞を付加しなくてはならない。

c. **Jean est *un* étudiant qui travaille bien.** ジャンはよくできる学生だ。

ところがこの説明は非制限節には無効である。非制限節は先行詞を限定しないからである。非制限節については次のように考えることができる。

Paul a prêté secours à Jean, qui est son meilleur ami.

ポールはジャンに救いの手を差し伸べた。ジャンは彼の親友である。

多くの文法書が指摘しているように、非制限節は独立節に書き換えることができる。

Paul a prêté secours à Jean. Celui-ci est son meilleur ami.

非制限節では先行詞 (Jean) は關係節とは独立にその指示が確定している。書き換えた独立節の主語 celui-ci は Jean と同一指示である。同じように非制限節では Jean と關係代名詞 qui が同一指示関係にある。同一指示は外延のある名詞句の間にしか成り立たない。外延を持つためには先行詞は冠詞などによって現働化を受けていなくてはならない。

(4) 属詞・状況補語を先行詞とする場合

先行詞は冠詞などによって現働化されていて、外延を持たなくてはならないという制約は、先行詞が属詞の場合は成り立たないように見える。

a. Il n'est plus l'homme qu'il était. [先行詞 l'homme は主語の属詞]

彼はもう昔のような人間ではない。

先行詞 l'homme は冠詞が付いてはいるが、外延を持たず性質を表していて非指示的である。

【参考】

英語ではフランス語よりも幅広い先行詞が可能である。このような用法では先行詞の外延は考えることができない。a. は制限節、b.~e.は非制限節。

a. I recalled the sweet little child (that) Harry used to be. [先行詞は主語の属詞]

私はハリーが昔かわいい子供だったのを覚えている。

b. John luckily escaped, which I couldn't. [先行詞は動詞句]

ジョンは幸運にも逃げたが、私は逃げられなかった。

cf. Jean s'est sauvé heureusement, ce que je n'ai pas pu faire.

c. Bill was drunk all the time, which is probably you would like to be. [先行詞は形容詞]

ビルはいつも酔っ払っている。たぶん君もそうありたいのだろう。

d. He answered the question politely, which I thought was how he should have answered it.

[先行詞は副詞]

彼は質問にていねいに答えた。そう答えるべきやり方だったと私は思う。

e. The cheese was bought by John, which was fortunate. [先行詞は文]

そのチーズはジョンが買ったが、それは幸運なことだった。

(5) 考察

a. Il a acheté *du pain*, qui est la nourriture principale des pauvres. [誤]

彼は貧しい人々の主食であるパンを買った。

先行詞が *du pain* のように部分を表す名詞で、関係節が総称的意味を表すときは容認されない。これは次のように説明できる。関係節を独立節に書き換えると次のようになる。

b. Il a acheté *du pain*. Le pain est la nourriture principale des pauvres.

彼はパンを買った。パンは貧しい人々の主食である。

du pain は「ある量のパン」で特定の対象を指す。一方、*le pain* は「パンというもの一般」を表す総称名詞句である。総称名詞句は独立した指示を持ち、他の名詞句と照応関係を結ぶことはない。非制限節の関係代名詞 *qui* は先行詞と同一指示でなくてはならないが、先行詞は部分を表す *du pain* で、関係代名詞が代理する *le pain* は総称名詞なので同一指示になることができない。このために容認されないのである。

5. 関係節の談話機能

(1) Hale (1975: 309)は、関係節には背景的な情報を提供するものと、背景的な情報を単に与えるのではなく断定をするものがあるという。

(3) a. I suddenly came face to face with the bear that had attacked me viciously.

以前猛然と私を襲った熊と私は突然鉢合わせすることとなった。

b. I suddenly came face to face with a bear that attacked me viciously.

私は熊と突然鉢合わせすることになったが、その熊は猛然と私に襲いかかってきた。

Hale は、関係節の機能は聴者に先行詞の指示を分からせるのに必要かつ十分であると話者が考える背景的な情報を与えることであるといい、この機能をもたない関係節として (3b) を挙げている。(3b) では、(3a) とは異なり、不定冠詞が用いられていることに注意しなければならない。(河野継代『英語の関係節』開拓社、2012)

cf. Hale, Kenneth L., "Gaps in grammar and culture", M. Dale et als. (eds) *Linguistics and Anthropology* (in Honor of C. F. Voegelin), Peter de Ridder Press.

【考察】

フランス語にすると次のようになる。

(3') a. Je me suis trouvé soudain face à face avec l'ours qui m'avait attaqué rageusement.

b. Je me suis trouvé soudain face à face avec un ours qui m'a attaqué rageusement.

例文 (3a) と (3b) には次のようなちがいがあことに注意しよう。ちなみに関係節はいずれも制限節である。

- ① (3a) では先行詞に定冠詞が (the bear)、(3b) には不定冠詞が付いている (a bear)。先行詞の限定詞のちがいが関係節の働きと関係しているのだろうか。
- ② (3a) では関係節の動詞は過去完了形に置かれていて (had attacked)、主節より過去の出来事を表す。(3b) では主節と同じ過去形 (attacked) に置かれており、主節と関係節は継起的に起きた出来事 (熊に出くわした→熊が襲ってきた) を表す。
- ③ (3a) では「関係節→主節」の順番で訳せるが、(3b) ではそれはできず、「主節→関係節」の順番で訳さなくてはならない。
- ④ (3b) のように関係節が継起的出来事を表す用法は、物語的であり小説などの語りによく用いられる。

「関係節が先行詞の指示対象の同定を助ける情報を提供する」というのは認めてよいと考えられる。ここで同定操作と先行詞の限定詞の問題が生じる。不定冠詞付き名詞句は「どれでもいいから一つ」を意味するので、指示対象の同定を必要としない。

a. *Passe-moi un verre.* コップを一つ取ってくれないか。

定冠詞付き名詞句は聞き手に指示対象の同定を求めるものであり、同定を助ける情報が必要な場合がある。

b. [テーブルの上にコップと紅茶茶碗と皿が一つずつある]

Passe-moi le verre. コップを取ってくれないか。

問題となる解釈領域はテーブルなので、*le verre* で対象を唯一的に同定できる。

c. [テーブルの上にコップと紅茶茶碗と皿が一つずつあり、流しにもコップが数個ある]

#Passe-moi le verre. コップを取ってくれないか。(＃は状況に対する不適切さを表す)

解釈領域はテーブルと流しを含む発話の場であり、その中にコップは複数あるので、*le verre* では対象を唯一的に同定できない。聞き手は *Lequel?* 「どれのこと？」と訊ねるだろう。次のように関係節が対象の同定に必要な情報を提供すると考えられる。

d *Passe-moi le verre qui est sur la table.* テーブルの上にあるコップを取ってくれないか。するとここから関係節の談話機能について次のような仮説を導くことができる。

【仮説】

先行詞が定冠詞付き名詞句の場合、関係節は先行詞の指示対象の同定に必要な情報を提供する談話機能がある。一方、先行詞が不定冠詞付き名詞句の場合、先行詞の指示対象の同定は求められておらず、関係節は単に補足的情報を表すだけである。

関係節は形容詞のように先行詞となる名詞に属性を付与するというのは、[主節+関係節]という一つの複文内部だけを考えたときの関係節の機能である。一方、「先行詞の指示対象の同定」は、一つの文の内部で完結する操作ではなく、話し手と聞き手による談話に新しい話題を導入するという、文を越えた談話機能に関わるものである。この問題を考えるためには、**私たちはどのようにして談話に新しい話題を持ち出すのか**ということを考察しなくてはならない。

(2) 談話に新しい指示対象を導入する際に必要な定位操作：関係節による

As we will show presently, GROUNDING is the primary way in which speakers make an NP relevant. To ground a noun phrase is to locate its referent in conversational space by relating it to a referent whose relevance is clear, that is, to a Given referent in the immediate context. (...)

We have isolated three central kinds of grounding. The first is what Prince has called ANCHORING (1981: 236): “A discourse entity [=‘referent’ in the terminology of this paper] is Anchored if the NP representing it is LINKED, by means of another NP, or “Anchor”, properly contained in it, to some other discourse entity.” An example of an NP which is anchored by an “NP properly contained in it”, namely in its relative clause, is given at the arrow in 4:

(4) (talking about upkeep on houses)

But uh — the original price of it, uh — you can’t even (inaud.) the original price,
just that little screen porch alone is five hundred dollars,
→ the aircondish—the uh heater thing [we put in] I think was a hundred uh five six
hundred dollars.

(Fox, A. Barbara & Sandra A. Thompson, “A discourse explanation of the grammar of relative clauses in English conversation”, *Language* 66(2), 1990)

cf. Prince, Ellen, “Toward a typology of given-new information”, Peter Cole (ed.) *Radical Pragmatics*, Academic Press, 1981.

すぐ後に示すように、定位操作 (grounding) は話し手・聞き手がある名詞句を談話に関連づけるための主要な方法である。名詞句を定位するとは、その名詞句の指示対象を、現行の文脈においてすでに関連性が明らかな指示対象、つまり既知の対象と関係づけることによって談話のスペースに導入することをいう。(…)

私たちは3種類の主な定位のやり方を見つけた。最初のやり方はプリンスが「投錨」(anchoring)と呼んだ方法である。「談話の指示物(本論文の「指示対象」)が投錨されているとは、その対象を表す名詞句が、その一部である「アンカー」と呼ぶ他の名詞句によって、他の談話の指示物にリンクされているときである」。その一部をなす名詞句、すなわち関係節によって投錨されている例

は(4) の矢印の部分である。

(4) (家の維持費について話している)

でも、あの — その元の値段は — 元の値段がいくらかさえ [聞き取り不能] でしょう。

あの小さな玄関ポーチのスクリーンだけで 500 ドルするんですよ。

→ エアコン — [うちが付けた] 暖房器具はたしか 500 ドルか 600 ドルはしたと思う。

【解説】

名詞句の指示対象の「定位」(grounding)というのは、平たく言えば「何のことを話しているのか」を聞き手にわからせるやり方のことである。談話の中に新しい話題を持ち込むときは注意が必要で、聞き手にわかるようにしなくてはならない。

- a. [起きて来た夫が妻に] 新聞、どこ？
- b. [教室で学生同士が] 先生、遅いね。
- c. [学生食堂で学生が友人に] #辞書どこにある？

a.の「新聞」はその家で定期購読している新聞の今朝の朝刊を指しているのだろうと語用論的知識をもとにして推測できる。b.の「先生」は、学生のいる教室でこれから始まる授業を担当している先生だと察しがつく。しかし c.の「辞書」は何をさしているかわからない。「学生食堂」という場面と「辞書」の間に関連性がないからである。たとえば次のようにしなくてはならない。

- d. [君がさっき授業で使っていた] 辞書どこにある？

連体修飾句「君がさっき授業で使っていた」はフランス語の関係節に相当する。この例で「辞書」のアンカーとして働いているのは、連体修飾句の中に含まれた「君」つまり聞き手である。「辞書」を既知の要素である「君」とリンクさせることで指示対象の同定を助けている。英語の例では *The heat things was five or six hundred dollars.* 「暖房器具は 500 ドルか 600 ドルした」とすると *the heat things* が何を指しているのかわからない。*The heat things [we put in]* 「うちが付けた暖房器具」のように *we* とリンクされることで同定を助けている。

(3) 主節が行う定位操作

NP can also be grounded by means of what we will call MAIN-CLAUSE GROUNGING. Here the relative clause provides no grounding; that is, it does not relate its Head NP to any Given discourse referent. Instead, the main clause situates the NP in question (typically an object) by relating it to a Given referent (typically the subject of that main clause) together with a semantically neutral main verb expressing possession, such as *have* or *has got*. In this way, the Head NP is grounded by virtue of being associated with a Given referent in the same main clause, as opposed to being grounded by virtue of its relative clause. (...)

(5) *he's got — a spring [that comes, way up]* (Ibid.)

名詞句は、私たちが「主節による定位」と呼ぶやり方で定位されることもある。このやり方では関係節は定位をしない。つまり、関係節が先行詞を既知の談話の指示物とリンクさせることはない。そのかわりに、主節が（多くの場合は物である）名詞句を、（多くの場合その主節の主語である）既知の指示対象に結びつけることによって定位する。このとき *have* とか *has got* のように、所有を表す意味の希薄な表現が用いられることが多い。このやり方では、先行詞は同じ主節の中にある既知の指示対象とリンクすることで定位され、関係節によって定位されるのではない。

(5) 彼は [高く吹き上がる] 温泉を掘り当てた

【解説】

主節の主語が直接目的語と所有・入手などの関係に立つことによって目的語を談話に導入する方法である。このとき直接目的語はふつう不定名詞句 (a spring) であり、もともと聞き手に同定を要求する名詞句ではない。このように談話にとっての新情報は直接目的語の位置で導入されることが多い。

(4) 連想照応による定位操作

The third kind of grounding is what we will call PROPOSITION-LINKING, whereby an entity is linked to Given referents by means of frames invoked in earlier discourse.

(6) The mother's sister is a real bigot. Y'know and she hates *anyone* [who isn't a Catholic]

In this example, the entire NP *anyone who isn't a Catholic* is grounded by its link (through the frame invoked by *bigot*) to the preceding proposition characterizing the mother's sister as a bigot.

(Ibid.)

3 番目の定位のやり方は、私たちが「命題への関連づけ」と呼ぶ方法である。この方法では対象は、先行談話において呼び出されたフレームによって既知の指示物にリンクされる。

(6) 母親の姉はとても偏狭な人です。それでね、姉は [カトリック教徒ではない] 人は誰でも嫌うんです。

この例では、「カトリック教徒ではない人は誰でも」という名詞句は、(「偏狭な人」という語によって呼び出されたフレームを通して)、母親の姉を偏狭な人だと述べる命題にリンクされている。

【解説】

この例はややわかりにくいだが、この方法はいわゆる連想照応によって新しい話題を談話に持ち込むやり方である。上の例では *anyone who isn't a Catholic* 「カトリック教徒ではない人は誰も」は不定名詞句であり、もともと同定を必要とするものではない。もっとわかりやすい次の例では、*le chauffeur* が *prendre un taxi* が呼び出すフレームを通して談話に導入されている。

i) Hier, j'ai pris un taxi pour aller à la gare St. Lazarre. *Le chauffeur* était croate.

昨日、サン・ラザール駅まで行くのにタクシーに乗った。運転手はクロアチア人だった。

(5) Fox & Thompson (1990) のまとめ

Fox & Thompson (1990) は会話英語における関係節の働きを考察した論文で、談話における指示対象の定位 (grounding) を軸に論じている。まとめると次のようになる。例は東郷の作例である。

① 定位操作その 1

関係節に含まれている既知項目との関連によって先行詞の指示対象を定位する。先行詞は同定を必要とする定 (*défini*) の項目である。

Où est la montre *que je t'ai donnée l'année dernière* ?

私がお前に去年あげた腕時計はどこにある？

② 定位操作その 2

不定の指示対象を直接目的語として談話に導入する。その指示対象は既知項目の主語と

の関連づけによって定位される。指示対象の同定は求めている。

J'ai acheté une nouvelle voiture. 私は新しい車を買った。

③ 定位操作その 3

先行文脈が喚起するフレームによって定位される。指示対象の同定は求めることも、求めないこともある。

[チェスを始めようとして] *Tiens ! Il manque un pion.* おや、ポーンが一つ足りない。

【疑問】

Fox & Thompson は会話英語には 3 通りの定位操作があるとした。しかし関係節が役割を果たしているのは①だけであり、先行詞は聞き手による同定を必要とする「定」(*défini*) の名詞句である。その場合は、確かに関係節は指示対象の同定を助けていると言える。では先行詞が同定を必要としない「不定」(*indéfini*) の関係節はいったいどんな機能を果たしているのだろうか。

(6) 2 種類の関係節：新しい指示対象の属性付与 vs. 既知の指示対象の同定

In general, grounding is essentially a background task, as opposed to asserting. That is, a grounding clause does not assert in the usual sense of that term, but merely locates the referent in conversational space. For example, compare the two utterances in 7 and 8. In 7 the relative clause is clearly used to ground the referent and does not make an assertion. But the relative clause in 8 does not ground the referent in the ways we have mentioned; rather, it makes an assertion.

(7) *This man* [who I have for linguistics] is really too much.

(8) There's *a woman* in my class [who's a nurse]. (...)

For the purposes of this study, we found it useful to distinguish two functional types of relative clauses. In the first type the relative clause provides a characterization or description of a New Head NP referent not previously known to the hearer, as in 9.

(9) There's *a woman* in my class [who's a nurse].

In the second type the relative clause helps to identify a Given Head NP referent, previously known to the hearer.

(10) and then *the one* [that's bigoted], she's married to this guy. (Ibid.)

一般的に言って、定位操作は断定 (*assertion*) と較べると裏方の仕事である。つまり定位操作をしている節は、ふつうの意味で断定はしておらず、指示対象を会話のスペース内に位置づけるだけである。例えば次の例 (7)と(8)を較べてみよう。(7)では関係節は明らかに指示対象を定位する役割を果たしており、断定はしてはしない。しかし(8)の関係節は、ここで述べたような意味において指示対象を定位しているわけではない。そうではなくこの関係節は断定している。

(7) [私が言語学を習っている] この人は少しやり過ぎだ。

(8) 私のクラスに [看護師をしている] 女性がいる。(...)

本研究の目的のためには、関係節の 2 種類の機能的タイプを区別することが便利であることがわかった。第 1 のタイプの関係節は例(9)のように、聞き手に未知の新規の先行詞について、その属性や記述を付加するものである。

(9) 私のクラスに [看護師をしている] 女性がいる。

第 2 のタイプの関係節は、すでに談話に登場済みの先行詞の同定を助ける役割がある。

(10) そして [偏狭だった] その人は、この男と結婚したんですよ。

【解説】

上の引用では、会話英語において関係節が果たす談話機能には、異なる二つのタイプがあるとされている。一つ目は次のようなタイプである。

i) *There is a woman in my class who is a nurse.*

私のクラスに看護師をしている女性がいる。

その特徴は：

- ① 先行詞は不定名詞句 (a woman) で、聞き手にとって新しい指示対象である。
- ② 関係節は新しい指示対象の属性・性質を述べている。
- ③ 関係節の内容は断定されている (≒新情報である)。

もう一つは次のようなタイプである。

ii) *and then the one that's bigoted, she's married to this guy.*

そして偏狭だったその人は、この男と結婚したんですよ。

その特徴は：

- ① 先行詞は定 (the one) で、すでに談話に登場していて聞き手にとって既知の指示対象である。
- ② 関係節は談話に導入済みの指示対象の中から、意図するものを選び出して同定を助ける働きがある。
- ③ 関係節の内容は断定されていない (≒新情報ではない)。

N. B. 例 ii) はわかりにくいですが次のように考えられる。先行談話において何人かの人が既に話題になっている (談話に導入済みで聞き手にとって既知)。the one that's bigoted 「偏狭な方の人」はそのうちの一人を指しており、関係節 that's bigoted は何人かの人の中から意図する人を選び出し同定するための情報を提供しているということである。

(7) 考察

タイプ 1 についてはそれほど問題はない。There is a woman in my class who is a nurse. 「私のクラスに看護師をしている女性が一人いる」では、先行詞 a woman も関係節 who is a nurse も聞き手にとって新情報であり、断定されていると考えてよい。

タイプ 2 についてはさまざまな疑問がある。

【疑問 1】

挙げられている例の先行詞は不定代名詞 the one であり、もともとそれだけでは指示が決まらず補足的情報を必要とする。先行詞が不定代名詞以外の場合でも同じことが言えるのだろうか。

〔この説明がうまく当てはまりそうな会話フランス語の例〕

[昔、オリーブの収穫に使っていた籠について]

L2 alors les femmes et les hommes avaient des paniers différents

L1 oui - les paniers ①les paniers qu'avaient les femmes n'étaient pas les mêmes que les paniers pour les hommes c'est c'est - quoiqu'il y avait des hommes qui euh - bon il y avait ②des hommes qui pouvaient utiliser ③le panier qu'utilisaient les femmes - alors que je me souviens

pas avoir vu des femmes mettre le pendre le panier au cou

(Blanche-Benveniste, Claire et als. (eds) *Choix de textes de français parlé. 36 extraits*, Honoré Champion, 2002)

L1 じゃあ、男性と女性はちがう籠を持っていたんですね。

L2 そう。①女性が持っていた籠は男性用の籠と同じじゃなかったんだ。それは、それは…そういう男性はいたけれど…そう、③女性が使っていた籠を②使っていた男性はいたよ。でも男性用の籠を持って首にかけている女性を見た記憶がないね。

① les paniers qu'avaient les femmes

les paniers 「籠」は先行談話で既出（既知）の指示対象であり、定名詞句である。関係節はその籠のうちどの籠かという同定情報を提供している。関係節の内容は先行談話から既知と見なせる。

② des hommes qui pouvaient utiliser...

des hommes は先行談話で既出ではあるが、あらためて関係節を付けて「こういう男性」と限定している。関係節の内容は新情報。

③ le panier qu'utilisaient les femmes

上の①と同じ。

〔この説明がうまく当てはまりそうにない例〕

a. L'aventure enfin commençait et le mariage devenait sinon probable, du moins possible, envisageable en tout cas, bien que dans ce projet d'hymen, *le seul mot qui le justifiait* n'ait jamais été prononcé de part et d'autre ; le mot «AMOUR». (Arley, C., *La femme de paille*)

こうしてどきどきするような冒険が始まり、夢見ていた結婚は実現しそうとは言えないまでもありうることとなり、いずれにしても起きてもおかしくないこととなったのだ。しかしこの結婚の企てでは、それを正当化するただ一つの単語がどちらからも口にされることはなかった。「愛」という言葉は。

先行詞 *le seul mot* は定だが既出ではない。また関係節 *qui le justifiait* も既出の指示対象の中から同定を助けているわけではなく、その内容は新情報である。

b. On voyait un filet de jour pâle et cru entre *les rideaux qui ne fermaient jamais hermétiquement*. Il attendit encore un peu, couché sur le dos, les yeux ouverts. L'odeur du café lui parvint... (Simenon, G., *Un Noël de Maigret*)

決して完全には閉まらないカーテンの隙間から薄い朝日がさすのが見えた。メグレはあおむけにベッドに横たわり、目を閉じてさらに少し待った。コーヒーの香りが漂ってきた。

室内の描写から連想照応の関係にあるとは言えるが、先行詞 *les rideaux* は既出ではない。また関係節の内容も「どのカーテンか」を同定する情報とは言えない。

次のように考えることも可能である。Fox & Thompson が2種類の関係節の機能を区別したのは、会話英語のコーパスを分析してのことである。この2種類の区別があらゆる場合に関係節に当てはまるとは主張していない。上にあげた当てはまりそうにない例はどちらも小説からの引用である。会話と小説のような語りとは、関係節の機能が異なることも

考えられる。

【疑問 2】

二つ目のタイプの *and then the one that's bigoted, she's married to this guy.* については、関係節は「断定されていない」(does not make an assertion)と述べられている。断定されていないのならば、関係節は何をしているのだろうか。ふつう「断定」(assertion)と対をなす語は「前提」(presupposition)である。だとすると二つ目のタイプの関係節の内容は前提されていると見なしてよいのだろうか。

(8) (1)で示したように Hale (1975)は制限的關係節には次のように 2 種類あるとした。

a. I suddenly came face to face with the bear that had attacked me viciously.

私を激しく襲った熊と突然鉢合わせすることとなった。

b. I suddenly came face to face with a bear that attacked me viciously.

私は熊と突然鉢合わせすることになったが、その熊は激しく私に襲いかかってきた。

ところが面倒なことに、非制限的關係節にもまた 2 種類を区別できるという意見もある。

「情報構造の視点から見ると、さらにもう一つの要因が関係してくる。非制限節には少なくとも二種類ある。主節の内容にとってあまり重要ではない、付加的、コメント的な内容を表す同格的なもの、主節と同程度重要な内容を表す断定的なものとの二つである。前者の典型が同格的關係節 (appositive relative) であり、後者の典型が継続的關係節 (continuative (relative) clause) である。」(河野継代『英語の關係節』開拓社、2012)

【補足】

河野は上の引用箇所では実例を挙げていないが、フランス語では次のようなものに相当すると考えられる。

a. 同格的非制限節 (付加的、コメント的内容)

Il n'était pas triste. Simplement son rêve — *dont il ne se souvenait toujours pas* — lui laissait comme une sensibilité à fleur de peau. (Simenon, G., *Un Noël de Maigret*)

メグレは悲しいではなかった。ただ彼が見た夢 - その内容はあいかわらず思い出せなかった - が、ひりひりする感性のようなものをメグレに残していたのである。

b. 継起的非制限節 (主節と同等な断定を行なう)

Il préféra, par précaution, aller se donner un coup de peigne, se brosser les dents et se passer un peu d'eau sur le visage. Il était encore dans la chambre, *où il rallumait sa pipe*, quand il entendit sonner à la porte. (Ibid.)

メグレは用心のために、髪に櫛を当て、歯を磨き、顔に少し水をかけに行った。メグレはまだ自分の寝室にいて、パイプに再び火を点けた時に、ドアチャイムが鳴るのが聞こえた。

(9) 疑問

Hale や河野が主張していることを総合すると、制限節には背景的情報を提供するものと断定するものの 2 種があり、非制限節にも付加的情報を与えるものと断定するものの 2 種があることになる。

a. 制限節

i) 背景的情報を与えるもの

Ils étaient assis dans la salle à manger, avec le plateau d'argent sur un coin de la table, la tasse de café *qui fumait*, les croissants dorés dans une serviette. (Simenon, *op. cit.*)

彼らは食堂に座っていた。テーブルの隅には銀のお盆があり、その上には湯気の立つコーヒーカップとナプキンに包まれた黄金色のクロワッサンが置かれていた。

ii) 断定するもの

Il sortit un étui d'or de sa poche et lui offrit une cigarette *qu'il alluma à un briquet d'or également.* (Arley, C., *La femme de paille*)

男はポケットから金のシガレットケースを取り出し、彼女にタバコを一本渡すと、同じく金製のライターで火を点けた。

b. 非制限節

i) 付加的な情報を与えるもの

La blonde paraissait hésiter, prête à battre en retraite. La brune, toute petite et toute maigre, insistait, et Maigret eu l'impression qu'elle désignait ses fenêtres. Dans l'encadrement de la porte, derrière elles, la concierge parut, *qui semblait venir à la rescousse de la maigre ...* (Simenon, *op.cit*)

ブロンドの方の女性はためらっているようで、今にも引き返しそうだった。茶色の髪の女性は小柄で痩せていて、何か言い張っている。メグレは彼女が自分のアパートマンの窓を指さしたような気がした。ドアの所の女性たちの背後に管理人が姿を現した。管理人は茶色の髪の女性に味方しているようだった。

ii) 断定するもの

La petite maigre, Mlle Donceur. Elle habite en face, au même étage que nous, et travaille toute la journée près de la fenêtre. C'est une demoiselle très bien, *qui fait de la broderie fine pour une maison du faubourg Saint-Honoré.* (Ibid.)

小柄で痩せている方の女性はドンサールさん。向かいのうちと同じ階に住んでいて、一日中窓辺で働いています。とても立派な女性で、フォーブール・サントノレにあるお店のために高級な刺繍をしているのよ。

しかしもともとは、制限節は先行詞の指示対象の外延を限定する働きがあり、削除すると文意が変わるのにたいして、非制限節は付加的な説明を加えるだけで、削除しても文意は変わらないとされていたのではなかったのではないか。

(10) まとめと疑問 — その1

制限節が背景的情報を与えてもさまざまなケースがある。(9 a. i) ... *la tasse de café qui fumait...* では関係節が先行詞の外延を狭めているとは思えず、削除しても文意は変わらない。しかし次はそうではない。

a. Elle alla chez l'éditeur *pour lequel elle faisait des traductions* et réussit à en rapporter du travail supplémentaire pour améliorer sa garde-robe et franchir enfin la porte d'un institut de

beauté.

(Arley, C., *La femme de paille*)

ヒルデガルドは翻訳の仕事をしている出版社に行き、首尾よく追加の仕事をもらうことができた。これで手持ちの服を少し増やして、ようやく美容院の敷居をまたぐこともできる。

この例では関係節 *pour lequel elle faisait des traductions* を削除すると、どの出版社かわからなくなる。削除できないのはこのタイプの非制限節である。

一方、断定する制限節の場合は、削除すると断定された部分はなくなるが、先行詞を含む主節の文意が変わるわけではない。

b. *Elle entra dans un couvent où elle resta toute sa vie.*

彼女は修道院に入り、生涯をそこで過ごした。

→ 関係節を削除しても主節 *Elle entra dans un couvent.* の意味は変わらない。

(11) まとめと疑問 — その 2

非制限節は文意を変えずに削除できると言われているが、削除のもたらす効果は一様ではない。

a. *Simplement son rêve — dont il ne se souvenait toujours pas — lui laissait comme une sensibilité à fleur de peau.*

ただ彼が見た夢 - その内容はあいかわらず思い出せなかった - が、ひりひりする感性のようなものをメグレに残していたのである。

この例の関係節を削除しても主節の意味は変化しない。

b. *Simplement son rêve lui laissait comme une sensibilité à fleur de peau.*

ただ彼が見た夢が、ひりひりする感性のようなものをメグレに残していたのである。

しかし次の例の関係節を削除すると重要な情報が失われる。

c. *C'est une demoiselle très bien, qui fait de la broderie fine pour une maison du faubourg Saint-Honoré.* とても立派な女性で、フォーブール・サントノレにあるお店のために高級な刺繍をしているのよ。

d. *C'est une demoiselle très bien.*

とても立派な女性です。

【疑問】

制限節は先行詞の外延を狭める働きがあり、削除すると文意を損なうが、非制限節は先行詞の外延を狭めることがなく、補足的情報を付け加えるだけなので、削除しても文意は変わらないという文法書の説明は本当に正しいのだろうか。

6. 制限節・非制限節と断定の関係

(1) 関係節は前提を表すとする説が広く行われている。次の引用はその典型である。

一般論として、関係節とは従属節の一種であり、しかも名詞句を修飾するわけであるから、統語上も意味上も、主節に対して「従」の関係になる。談話分析の観点から言えば、主節が「断定」されるのに対して、関係節は「前提」とされるのが普通である。簡単な例を使うと、

(6. 36) *John started a drugstore with the woman he had married.*

(ジョンは結婚していた女性とドラッグストアを始めた。N.B. 訳は東郷)

John がある女性とドラッグストアを始めた、という内容が断定であり、John がその女性とすでに結婚していた、という内容が前提である。後者は、文脈などからすでに聴き手が了解している「旧情報」に属する内容であるのが普通だから、これは断定をおこなうための前提条件となる。

もちろん、これは基本原則のようなものであり、それに外れるケースはいくらでもある。もっともよく知られているのは、関係節内が断定される場合であろう。

(6. 37) a. I met the girl who speaks Basque.

(私はバスク語を話すその少女に会った。N.B. 訳は東郷)

b. I met a girl who speaks Basque.

(私はバスク語を話すある少女に会った。N.B. 訳は東郷)

(6. 37a)の関係節は (6. 36) と同じく前提とされるが、(6. 37b)の関係節は話者によって断定される。Zwicky (1971) によると、不定 (indefinite) 名詞に続く関係節の中身は断定の対象になる。(福地肇『英語らしい表現と英文法』研究社出版、1995)

(2) 実際には Zwicky は次のように述べている。

例 (14) A friend of mine who is good at chess will be staying with me for a week.について Restrictive relative clause within definite NP's are not assertive, and restrictive relative clauses within indefinite NP's are frequently not assertive. It seems quite clear to me, however, that (14) has at least one reading involving two assertions, although I have at the moment no characterization of the class of assertive relatives clauses.

(Zwicky, Arnold, M, "On reported speech", Fillmore, Ch. et als (eds) *Studies in Linguistic Semantics*, Holt, Rinehart & Winston, 1971, p. 75, note 2)

(14) チェスが上手な私の友人が一週間私の家に泊まることになっている。

定名詞句に続く制限的關係節は断定ではない。また不定名詞句に続く制限的關係節は断定でないことが多い。しかし(14)には少なくとも2つの断定を含む読みがあることは私には明らかだと思われる。断定を行う關係節のグループをどう特徴づければよいかは今のところ不明である。

【解説】

Zwicky 自身は、「先行詞が不定の關係節は断定を表す」とは述べていない。先行詞が定の關係節は断定ではなく、先行詞が不定の關係節も多くは断定ではないと述べるに留まっている。しかし先行詞が不定の關係節が断定を表すこともあり、(14)はその例だという。(14)の關係節 who is good at chess は、聞き手にとってまったくの新情報でありうる。

(3) 關係節と断定の關係について、Zwicky よりもはっきりした主張を展開している研究に Hooper & Thompson (1972)がある。

RTs (=root transformations) may not apply in restrictive relative clauses on definite head noun, but they may apply in NRs (=nonrestrictive relative clauses). The former are presupposed, but the latter are not, as we argued above. (...)

Intuitively there seems to be little reason for doubting that NSs are asserted rather than presupposed, and in fact there is positive evidence to indicate that they are asserted. (...)

Although restrictive relative clauses with definite head nouns are always presupposed, restrictive relative clauses with indefinite head nouns are *not* presupposed. (...) Once again, there

appears to be evidence confirming the hypothesis that relative clauses with indefinite head nouns are assertions. (...)

These observations add to our understanding of the differences between types of relative clauses. The difference between restrictive and nonrestrictive clauses has typically been illustrated in the literature with definite nouns and has been assumed to be that restrictives “further delimit” the class of items named by the head noun, while NRs “give more information” about the item named by the head noun. Restrictives with indefinite head nouns do not fit nicely into this dichotomy and have generally been ignored.

The data presented here make it clear that the important distinction between restrictive and nonrestrictive relative clauses is the distinction between presupposition and lack of presupposition. When semantic notions are taken into account, we find that restrictive relative clauses with indefinite head nouns are more like NRx than they are like restrictive relatives with definite head nouns. (Hooper, J. B. & S. A. Thompson, “On the applicability of root transformations”, *Linguistic Inquiry* 4-4, 1972)

根変形(次の(4)を参照)は、先行詞が定の制限節には適用できないが、非制限節には適用できる。先行詞が定の制限節は前提である(下線は東郷)が、すでに論じたように非制限節は前提ではない。
(…)

直感的に言って、非制限節が前提ではなく断定であることを疑う理由はほとんどない。実際、非制限節が断定であることを示す証拠がある。(…)

先行詞が定の制限節は常に前提を表すが、先行詞が不定の制限節は前提ではない(下線は東郷)。
(…) ここにもまた、先行詞が不定の関係節は断定を表す(下線は東郷)という私たちの仮説が正しいという証拠がある。(…)

上に示したデータは、関係節の異なるタイプに関する私たちの理解を深めてくれる。先行研究において、制限節と非制限節のちがいは主に先行詞が定の例を挙げて説明されてきた。そして制限節は先行詞が表す対象のクラスを「さらに限定する」とされ、非制限節は先行詞がさす対象に「情報を付加する」とされてきた。先行詞が不定の制限節はこのような二分法にうまく当てはまらず、たいていは無視されてきたのである。

上に挙げたデータが示しているのは、制限節と非制限節の重要なちがいは前提があるかないかのちがいだということである。意味的な概念を考慮に入れると、先行詞が不定の制限節は、先行詞が定の制限節よりも非制限節に近いということがわかる。

(4) 根変形 (root transformation) とは何か

生成文法家の Emonds の用語。詳しい定義は省略するが次のように単語を移動して語順を変える操作をさす。(以下は網羅的ではない)

a. 動詞句前置 (VP preposing)

John intends to make a table, and *make one* he will.

ジョンはテーブルを作るつもりで、実際に彼は作るでしょう。

b. 付加疑問形成 (tag question formation)

Mary won't buy this dress, *will she?*

メアリーはこのドレスを買わないのですよね。

c. 否定構成素前置 (negative constituent preposing)

Never have I had to borrow money.

私は借金をする羽目になったことは一度もない。

d. 方向副詞前置 (directional adverb preposing)

Away they ran. 彼らは逃げて行った。

e. 右方転移 (right dislocation)

Jane visits it every weekend, this park.

ジェーンは毎週末来ます、この公園に。

f. 左方転移 (left dislocation)

This park, Jane visits it every weekend.

この公園にはジェーンは毎週末来ます。

g. 比較形前置 (comparative substitution)

Most embarrassing of all was losing my keys.

いちばん困ったのは鍵をなくしたことです。

h. 分詞前置 (participle preposing)

Standing next to me was the president of the company.

私の隣には会社の社長が立っていた。

i. 前置詞句前置 (prepositional phrase preposing)

On the wall hangs a portrait of Jane.

壁にはジェーンの肖像がかかっている。

j. 主語・助動詞交替 (subject-auxiliary inversion)

Isn't that a beautiful painting! 何てきれいな絵でしょう。

根変形による単語の移動は、通常の話順とは異なる有標の話順を生み出すものであり、話し手による何らかの強調を表す。このため根変形は主節にしか適用できず、従属節には起こらないとされる。その理由は、従属節は主節が断定する意味内容の背景となる情報 (background information) を表すため、話し手による強調を表さないからだとされてきた。

i) *I've been out of work before, but never have I had to borrow money.* [主節]

私は以前失業したことがあるが、借金をする羽目になったことは一度もない。

ii) **The children that never in their lives had had such fun fell into bed exhausted.* [関係節]

今まで一度もこのような楽しみを味わったことのなかった子供たちは、疲れ切ってベッドに倒れ込んだ。

(5) Hooper & Thompson (1973) が主張したのは次のことである。

- ① 根変形を適用できるかどうかは、主節か従属節かという区別によるものではない。根変形は断定 (assertion) を表す節では適用でき、断定を表さない節では適用できない。
- ② 非制限的關係節は断定を表す。このため根変形が適用できる。
- ③ 先行詞が不定の制限的關係節は断定を表す。このため根変形が適用できる。
- ④ 先行詞が定の制限的關係節は前提を表す。このため根変形が適用できない。

(6) Hooper & Thompson (1973) の例証 (その 1)

非制限節には根変形が適用でき、先行詞が定の制限節にはできない。

a. 否定構成素前置

i) This car, which *only rarely* did I drive, is in excellent condition.

この車はめったに乗らなかったのでも状態がよい。

ii) * This car which *only rarely* did I drive is in excellent condition.

私がめったに乗らなかったこの車はとても状態がよい。

b. 前置詞句前置 (主語倒置)

i) The rotunda, *in which* stands a statue of Washington, will be repainted.

この丸屋根の建物の中にはワシントンの彫像が立っているが塗装し直されるだろう。

ii) * The rotunda *in which* stands a statue of Washington will be repainted.

ワシントンの彫像が立っているこの丸屋根の建物は塗装し直されるだろう。

c. 分詞前置 (主語倒置)

i) The track meet, *running* in which will be Jerry Jones, will start at 3:00.

その陸上競技会にはジェリー・ジョーンズが出ることになっているが、3時に始まる。

ii) * The track meet *running* in which will be Jerry Jones will start at 3:00.

ジェリー・ジョーンズが出ることになっている陸上競技会は3時に始まる。

d. 付加疑問形成

i) I just ran into Susan, who was your roommate at Radcliffe, *wasn't she*?

たまたまスーザンに会ったんだけど、彼女はラドクリフで君のルームメイトだったよね。

ii) * I just ran into Susan who was your roommate at Radcliffe, *wasn't she*?

ラドクリフで君のルームメイトだったスーザンにたまたま会ったんだけど、そうだったよね。

(7) Hooper & Thompson (1973) の例証 (その2)

先行詞が不定の制限節には根変形が適用できる。ただしこの論文に挙げられているのは2例しかない。

a. 否定要素前置

I saw a dress which *under no circumstances* would I have bought.

私はドレスを見かけたが、それは私なら絶対に買わないようなものだった。

b. 前置詞句前置

Between the lobby and the vault is a hallway *in which* stands an armed guard.

ロビーと丸天井の間には通路があって、そこに武装した警備員が立っている。

(8) *frankly* や *I think* のように話し手の態度を表す表現は断定を表す節でしか用いることができない。先行詞が不定の制限節ではこれらを用いることができる。

a. John bought a painting that *frankly* I find rather ugly.

ジョンは正直言うと私には醜悪に思える絵を買った。

b. Fred has a cough that sounds, *I think*, like pneumonia.

フレッドは私には肺炎だと思える咳をしている。

(9) 非制限節と先行詞が定の制限節は前提を表し、先行詞が不定の制限節は断定を表すという主張がもし正しいとするならば、なぜ伝統的には制限節=前提、非制限節=断定とされてきたのだろうか。その理由の一つは Hooper & Thompson も述べているように、制限節と

非制限節のちがいはほぼ常に先行詞が定の例文を用いて説明されてきたからである。次に挙げる複数の文法書からの引用もそのことを示している。

- a. *Les soldats qui ne s'étaient pas sauvés, furent faits prisonniers.*

逃げなかった兵士は捕虜にされた (限定的)

Les soldats, qui ne s'étaient pas sauvés, furent faits prisonniers.

兵士たちは逃げなかったから捕虜にされた。(説明 (同格) 的)

(朝倉季雄『新フランス文法事典』白水社、2002)

- b. [制限節]

Connaissez-vous la personne qui s'occupe de cette affaire ?

この事件の担当者をご存じですか。

[非制限節]

Ce roman, dont j'ai oublié le titre, m'avait passionné.

題名は忘れたが私はその小説に夢中になった。

(目黒士門『現代フランス広文典』白水社、2015)

- c. [制限節]

Je vais te montrer le pull que j'ai acheté hier.

昨日買ったセーターを見せてあげるよ。

[非制限節]

Le roi, qui allait bientôt partir en guerre, organisa une grande fête.

まもなく戦に出ることになっていた王は盛大な祝典を催した。

この例では、単なる『セーター』のことを言っているのではなく、『私が昨日買った』という修飾句によって意味的な限定を受け、1 つのものに特定された『セーター』を指しています。定冠詞 *le* も、そのように特定されたセーターにまで限定されたことにより現れたものです。

特定の 1 つに限定されてはいないけれども、意味的に範囲が狭められていることには違いないケースもあります。先行詞に不定冠詞 *un* などが付いている場合です。

J'ai un ami qui habite à Lyon.

私にはリヨンに住んでいる友だちがいる。

(六鹿豊『これならわかるフランス語文法』NHK 出版、2016)

(11) 考察

六鹿 (2016) は例外的に先行詞が不定の制限節を例として挙げている。しかしこの例で「意味的に範囲が狭められている」というのは、先行詞が持つ外延の限定と見なしてよいのだろうか。それは疑問である。

先行詞が定の制限節の場合、関係節は次のような働きをしている。

Les étudiants qui ont raté l'examen doivent redoubler.

試験に落ちた学生は留年しなくてはならない。

関係節がないときの先行詞 *les étudiants* は、たとえば「私のクラスの学生」のように文脈によってすでに限定された外延を持つ集合である。関係節 *qui ont raté l'examen* は、その

集合を「試験に受かった学生」と「試験に落ちた学生」に分けることによって先行詞の外延を限定する。これが先行詞が定のときの制限節の働きである。

一方、六鹿が挙げている例では働きが異なる。

J'ai un ami qui habite à Lyon.

私にはリヨンに住んでいる友だちがいる。

まず先行詞 *un ami* 自体は外延を持つ集合を表してはいない。不定冠詞は、その使用の前提となる集合 [(les) amis] から任意の要素を一つ取り出す操作 (extraction) を表す。関係節 *qui habite à Lyon* はそのようにして取り出された要素 *un ami* に属性を付け加えているだけであり、外延の集合を限定して狭めているわけではない。ここからも先行詞が定の制限節と先行詞が不定の制限節は異なる働きをしているということがわかる。

【考えられる反論】

次のような反論が出てくるかもしれない。この例でも関係節 *qui habite à Lyon* は外延集合を限定している。関係節がなければ *J'ai un ami*. 「私には友だちが一人いる」で *un ami* は、前提集合 [(les) amis] から任意の要素を一つ取り出している。しかし、関係節 *qui habite à Lyon* が付いた場合は、抜き出しの元となる前提集合は [(les) amis qui habitent à Lyon] である。単なる [友だち] より、[リヨンに住んでいる友だち]の方が小さな集合を表している。したがって関係節 *qui habite à Lyon* は、先行詞が定の場合と同じく、外延集合を限定する働きをしていることに変わりはない。

【この反論に対する反論】

上の反論には二つおかしい点がある。

① やはり先行詞が定のとときと不定のとときとは、制限節の働きは異なる。先行詞が定のとときは、先行詞 (*Les étudiants qui ont raté l'examen doivent redoubler.*なら *les étudiants*) 自体が表す外延集合を制限節が限定している。ところが先行詞が不定のとときは、先行詞 (*J'ai un ami qui habite à Lyon.*なら *un ami*) 自体が表す外延集合ではなく、不定冠詞の抜き出し操作の元となる前提集合を限定している。この二つの操作は同じものではない。

② 先行詞が不定の場合、制限節が不定冠詞の抜き出し操作の元となる前提集合を限定しているということがそもそも怪しい。このような考え方が成り立つためには、不定冠詞 (*un*) は、*ami* ではなく *ami qui habite à Lyon* を修飾していなくてはならない。つまり統語的な切れ目は、a)ではなく b)のようになっていなくてはならない。そうでないと [(les) amis qui habitent à Lyon] という集合から不定冠詞によって要素を一つ取り出すことはできない。

a) *J'ai [un ami] [qui habite à Lyon]*

b) *J'ai un [ami qui habite à Lyon]*

しかしこれは疑わしい。その根拠は少なくとも二つある。

① Fox & Thompson (1990) では関係節には二種類あるとされている。そのうち *There is a woman in my class who is a nurse.* 「私のクラスに看護師をしている女性がいる」というタイプの関係節は、談話に新しい指示対象を持ち込むときに用いられ、関係節の内容は新情報であり断定されているとしている。もし関係節が断定されているのならば、それは前提ではなく、不定冠詞の操作の元となる前提集合を作ることはできない。*J'ai un ami qui habite à*

Lyon.についても同じことが言える。

② *J'ai un Labrador*. 「私はラブラドルを一頭飼っている」と言うとき、聞き手は「この世にはラブラドルという犬種の犬がいる」ということを知っていなくてはならない。もし「私はスウェーデッシュ・ヴァルフントを一頭飼っている」と言ったとしたら、理解できずに「え、何それ？」と聞き返されてしまうだろう。ここから次を導くことができる。

【原則】

不定冠詞による抜き出し操作の元となる前提集合は、聞き手にとって既知でなくてはならない。

では *J'ai un Labrador qui marche sur l'eau*. 「私は水の上を歩くラブラドルを一頭飼っている」と言ったとしたらどうなるか。聞き手は「まさかそんなことありえない」とか「でたらめを言うなよ」とか言うだろうが、理解できずに「え、何それ？」と聞き返すことはないだろう。聞き手は不定冠詞による抜き出し操作を適切に理解できる。しかし [(les) Labradors qui marchent sur l'eau] という前提集合の存在を既知のものとして認めているとは考えられない。もしそうなら聞き手は「水の上を歩く犬」が存在することを信じていることになる。不定冠詞による抜き出しはあくまで [(les) Labradors] という集合に対して行われていると考えるべきである。

7. 制限的な制限節と非制限的な制限節

河野継代『英語の関係節』（開拓社、2012）は、関係節をめぐる従来の説を覆すユニークな論考を展開している。河野は東京学芸大学教授、本書は2013年度日本英語学会賞を受賞している。以下に河野の議論の概要を見てみよう。

河野の議論は次のように要約することができる。

【要約】

伝統的に、関係節には制限的關係節と非制限的關係節の2種があるとされ、制限的關係節は前提を表し、非制限的關係節は断定を表して独立の命題を作るとされてきた。しかしこの二分法はまちがっている。制限的關係節の中には、制限的な制限節と非制限的な制限節がある。先行詞が定有的时候は制限的な制限節であり、先行詞が不定有的时候は非制限的な制限節である。

(1) まず河野が目にするのは次のように、制限節でありながら非制限節と同じように主節とは独立の命題を表しているように見える例である。

a. *then* を含む制限節

Many of the rescued passengers were first taken to the island by helicopters *that then returned to continue the search*.

救出された乗客の多くはヘリコプターによってまず島に搬送され、その後ヘリコプターは現場にもどって捜索を続けた。

b. *in turn* を含む制限節

his left hand rests on a lever that activates a vacuum pump *that in turn operates both the gas and brake controls*.

彼の左手はレバーの上に置かれており、そのレバーによって真空ポンプが作動し、そして作動した真空ポンプによってアクセルとブレーキの両方が作動する。

c. *however* を含む制限節

There has, it must be said, always been a difference of opinion on the matter *which, however, divides more on professional than scientific grounds.*

その件については以前からずっと意見の相違があったと言わざるを得ないが、それは科学的根拠によるというよりは職業上の理由によるものである。

これらの例には次の特徴がある。

- ① 先行詞はすべて不定名詞句である (a. *helicopters*, b. *a vacuum pump*, c. *a difference of opinion on the matter*)
- ② 関係節はすべて文末に生じている。
- ③ 関係節を独立節に書き換えることができる。
 - a. ... *by helicopters*. Then the helicopters returned...
 - b. ... *a vacuum pump*. The pump in turn operates...
 - c. ... *a difference of opinion on the matter*. However this difference divides...

河野はこれらの関係節は、形式上は制限的關係節の形をしているが、意味機能的には非制限的關係節と同じ働きであるとし、これを「非制限的制限節」と呼ぶ。

(2) 制限的な制限節と非制限的な制限節の統語構造のちがい

河野は制限的な制限節と非制限的な制限節とでは先行詞が異なると主張している。

- a. 制限的な制限節の先行詞は限定詞を含まない [名詞] のみである。

[The [soldiers] [*that were brave*]] [*ran forward*]. →先行詞は *soldiers*
兵士たちのうち勇敢な者は突撃した。

- b. 非制限的な制限節の先行詞は限定詞を含む [冠詞+名詞] である。

I suddenly came face to face with [[*a bear*] [*that attacked me viciously*]]. →先行詞は *a bear*
私は熊と突然鉢合わせしたが、その熊は猛然と私に襲いかかってきた。

(3) この先行詞のちがいが関係節の働きのちがいを生んでいるというのが河野の主張である。その議論を理解するためには意味論の予備知識が必要となる。

関係節は形容詞のように名詞句を修飾限定する働きがある。形容詞は名詞の指示対象の属性を表す。フランス語の形容詞を例にとって修飾限定の働きを考えてみよう。

形容詞の属詞用法では、形容詞は主語名詞句の指示対象の属性を表す。次の例で形容詞 *ronde* は「テーブル」の持つ「丸い」という属性を表している。

- a. *Cette table est ronde*. このテーブルは丸い。

ところが付加形容詞用法では事情が異なる。付加形容詞用法では二つの機能を区別することができる。

- ① 形容詞は弁別的機能を持ち、形容詞の表す属性が当てはまるものと当てはまらないものを区別する。このとき形容詞は必ず名詞の後に置く。「色」「形」「国籍」「分野」などを表す形容詞は弁別機能を持つため名詞の後に置く。このような形容詞は「分類的」と呼ぶことができる。

b. *la cuisine française* フランス料理

→ 料理を「フランス料理」「イタリア料理」「中華料理」など国によって分類している

c. *une rose rouge* 赤いバラ

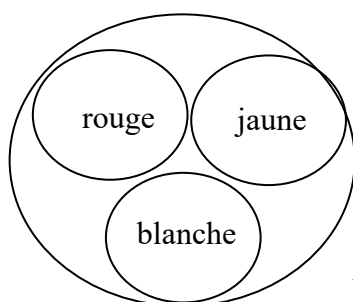
→ バラを「赤いバラ」「白いバラ」「黄色いバラ」のように色によって分類している

② 形容詞は弁別機能を持たず分類しない。単に名詞の指示対象の属性を表す

d. *une excellente idée* すばらしいアイデア

→ あるアイデアについて単に「すばらしい」と述べているだけで、すばらしいアイデアとそうでないアイデアを分類しているわけではない

ここで①の c. を例に取って冠詞と形容詞の係り方の順番を考えてみよう。次の図の大きな円はこの世に存在するバラ全体を表す。バラには赤、白、黄色しかないと仮定する。小さな円はそれぞれ「赤いバラ」「白いバラ」「黄色いバラ」という種類を表す。



このとき冠詞と形容詞の係り方の順番は [*une* [*rose rouge*]] となると考えられる。つまり *rouge* が *rose* に係って [*rose rouge*] となり、その全体に *une* が付いて [*une* [*rose rouge*]] となる。

なぜそうなるかという、不定冠詞 *une* が先に抜き出しを行うとすると、*une rose* の抜き出しの元となる集合は *rose* の集合全体、つまり図の大きな円になってしまう。不定冠詞 *une* はバラの集合全体からではなく、*rose rouge* の集合、つまり大きな円の中の小さな円から抜き出さなくては正しく赤いバラを取り出すことはできない。したがって、分類機能を持つ形容詞は、冠詞による現働化が行われるより前の段階ですでに分類を行っていかなくてはならないと考えられる。

ここから次の原則を導くことができる。

【分類機能を持つ形容詞の働きに関する原則】

分類機能を持つ形容詞は、冠詞が現働化を行う前の段階で裸の名詞を修飾限定する。裸の名詞は外延を持たず内包しかない。したがって分類機能を持つ形容詞は名詞の内包を修飾限定する。つまり、(*une*) *rose rouge* なら、*rose* が持つ内包 [バラ属、バラ科、香りが強い、園芸で好まれる、etc.] に「赤い」を付け加えて、*une* によって現働化されたときの対象となる外延を狭める。

これに対して② d. の *une excellente idée* 「すばらしいアイデア」では形容詞の係り方の順番がちがうと考えられる。ここでは形容詞に分類機能はないので、まず不定冠詞が名詞に係り *une idée* となって、それに *excellente* が係ると考えられる。

N. B. ただし、同じように形容詞が前置される *un vieil homme* 「老人」のような成句的な例では事情が異なるが、ここではこれ以上深入りしない。

(4) 類 (英 *kind*, *class* 仏 *espèce*, *classe*) と個体 (英 *individual* 仏 *individu*)

意味論ではしばしば「類」と「個体」を区別する。私たちが日常出会うものはすべて個体である。今日会う友人、昨日買った傘、今朝食べたリンゴはすべて個体である。私たちは知的な作用によって同じ性質を持つ個体を集めて抽象化して「類」を作る。たとえば今

朝食べたリンゴは「リンゴ」という類に属する個体である。「類」は抽象的な「概念」と同一視されることもあり、「カテゴリー」と見なすこともできる。

「類」と「個体」の区別が必要なのは、述語の中には「類」にしか用いることができないものがあることで示すことができる。*abonder*「たくさんある」、*se rarefier*「数が減る」、*s'éteindre*「絶滅する」、*être en voie d'extinction*「絶滅の危機に瀕している」などの述語は個体に用いることはできず、類のみを主語に取る。

a. *Jean {abonde / s'est éteint}. ジャンは {たくさんいる / 絶滅した}。

b. Le loup {abonde / s'est éteint}. オオカミは {たくさんいる / 絶滅した}。

c. Les loups {abondent / se sont éteints} オオカミは {たくさんいる / 絶滅した}。

このような述語を (英) kind-referring predicate、(仏) *prédicat de classe* と呼ぶ。

(5) 制限節は形容詞と同様に属性 (property) を表すということはすでに述べた。修飾部説によれば、制限節はそれが表す属性によって先行詞の意味を限定する。「類先行詞制限節」の場合には先行詞は類であるので、制限節はその属性によって先行詞である類を限定することになる。ある類をある属性によって限定するということは、その類をその属性があてはまる類とそうでない類との二つに下位区分し、前者の方の下位類を抽出するということである。この意味で類を先行詞とする制限節は「下位類形成機能」をもつといえる。類を先行詞とする制限節は「下位類形成制限節」と呼ぶべき制限節であることになる。

一方、「個体先行詞制限節」の場合は事情がかなり異なる。「個体先行詞制限節」の場合は先行詞は個体であるので、制限節はその属性によって先行詞である個体を限定する。個体をある属性によって限定しても下位類は形成できない。下位類を形成するためには先行詞はあくまで類でなければならず、個体ではその役割は果たせない。個体をある属性によって限定するということは、その個体はその属性をもつ個体であることを単に述べているにすぎない。つまり、制限節は先行詞である個体がどのような属性をもつ個体であるのかを叙述しているにすぎない。この意味で、個体を先行詞とする制限節は「属性叙述機能」を果たしているといえる。(河野継代『英語の関係節』開拓社、2012、p. 55-56)

【解説】

上の引用を理解するためには次の前提を知っておかなくてはならない。河野は次のように考えている。

- ① 限定詞のない裸名詞 (ex. dog) は外延がなく内包しか持たず「類」を表す。
- ② 裸名詞に限定詞が付くことによって、*the dog* が特定の犬をさしたり、*a dog* が任意の犬をさしたりするように個体を表すことができる。

例をもとに考えてみよう。

a. [The [soldiers] [*that were brave*]] [ran forward].

兵士たちのうち勇敢な者は突撃した。

河野によればこの例は次のように分析される。

- ① 先行詞は定なので、先行詞は限定詞を含まない裸の *soldiers* である。
- ② 先行詞の *soldiers* は類を表すので、これは類先行詞制限節である。
- ③ 制限節 *that were brave* は先行詞 *soldiers* を修飾限定し、下位類 [*soldiers that were brave*]

と[soldiers that were not brave]を形成する「下位類形成機能」を持つ。

- ④ したがってこれは制限的制限節であり、従来言われて来たように先行詞の意味を限定する働きがある。

b. I suddenly came face to face with [[a bear] [*that attacked me viciously*]].

私は熊と突然鉢合わせしたが、その熊は激しく私に襲いかかってきた。

- ① 先行詞は不定なので、先行詞は限定詞を含む a bear である。
 ② a bear は冠詞による限定を受けており個体を表す。これは個体先行詞制限節である。
 ③ 制限節 that attacked me viciously は先行詞 a bear に単に属性を付与するだけであり、下位類を形成しているわけではない。
 ④ したがってこれは非制限的制限節であり、先行詞の意味を限定しているわけではない。

(6) 制限的制限節と非制限的制限節の区別と前提の関係

下位類形成機能をもつ制限節は、話者が先行詞の表す類だけでは意図する下位類が聴者に伝わらないと考えた場合に使われる。したがって、制限節で述べられている内容は、その内容を付け加えることによって、聴者が正しく意図する下位類を抽出できるような内容でなければならない。聴者が正しく意図する下位類を抽出できるような内容であるためには、その内容を聴者が知っている少なくとも話者が思っているものでなければならない。この意味で、下位類形成制限節の内容は、語用論的に前提とされている情報であることになる。（下線は東郷による）

一方、属性叙述機能をもつ制限節の場合は、事情は全く異なる。この場合の制限節は下位類形成のための情報ではないので、その情報は聴者が知っている情報である必要はない。この意味で、属性叙述制限節の情報は、語用論的に前提とされていない情報であることになる。語用論的に前提とされていない情報ということは、聴者にとって全く新しい情報であっても構わないということである。一般に、聴者にとっての新情報は断定 (assertion) の対象となり得る。したがって、属性叙述制限節の内容は断定の対象となり得る情報であることになる。

(河野継代『英語の関係節』開拓社、2012、p. 57)

【解説】

河野の論理は次のように展開している。

- ① 制限的な制限節は下位類を形成する。
 ② 適切に下位類を形成するには、それに用いる属性 (=関係節の内容) は聞き手が知っているものでなくてはならない。
 ③ 聞き手が知っているものは語用論的前提である。
 ④ したがって制限的な制限節は前提を表す。
 ⑤ 非制限的な制限節は先行詞の属性を叙述する。
 ⑥ 下位類を形成するのではないので、叙述される属性 (=関係節の内容) は聞き手が知っているものである必要はない。
 ⑦ したがって非制限的な制限節は新情報を表すことができ、断定でありうる。

上の論理展開において疑わしいのは②である。ほんとうに聞き手にとって既知で前提となっている属性でなければ下位類を形成することはできないのだろうか。

(7) ここで参考のために Hawkins, J. A., *Definiteness and Indefiniteness. A Study of Reference and Grammaticality Prediction*, Croom Helm, 1978. の議論を見てみよう。

Hawkins は定冠詞の用法をいくつかに分類し、その中の *The ‘unfamiliar’ uses of the definite article in noun phrases with explanatory modifiers* 「説明的な修飾語句のある名詞句の中で『未知』のものを表す定冠詞の用法」という項目でこの問題を論じている。「説明的な修飾語句」とは関係節のことで、関係節の先行詞に付く定冠詞が問題となる。

Hawkins は次の a. では先行詞の *the woman* の定冠詞の使用は適切であるが、b. では適切ではないと指摘する。

a. What’s wrong with Bill? — Oh, **the woman** *he went out with last night* was nasty to him.

「ビルはどうしたんだ」「ビルが昨日デートした女性が彼にひどいことをしたんだ」

b. What’s wrong with Bill? — *Oh, **the woman** *who was from the south* was nasty to him.

「ビルはどうしたんだ」「南部から来た女性が彼にひどいことをしたんだ」

b. が適切に理解されるためには次のように書き換えないといけないという。

c. What’s wrong with Bill? — Oh, there is **a woman** *who was from the south and she was nasty to him.* 「ビルはどうしたんだ」「南部から来た女性がいて、その女性が彼にひどいことをしたんだ」

この例については次のような点が問題となる。

① a. では *the woman* の指示対象は聞き手にとって未知である。また関係節の内容 *he went out with last night* も聞き手にとって新情報である。それなのになぜ定冠詞を使うことができるのか。定冠詞はその指示対象を聞き手が唯一的に同定できると話し手が判断したときに用いる。*the woman he went out with last night* は聞き手にとって新情報なのに、聞き手はその指示対象を同定できるのだろうか。

② 同じように [定冠詞付き先行詞+関係節] であるのに、a. の定冠詞が適切で b. の定冠詞が不適切なのはなぜか。

(8) Hawkins は上の a. のような関係節を “reference-establishing relatives” 「指示を確立する関係節」と呼び、このような関係節では先行詞にいきなり定冠詞を用いることができるとしている。

I shall call such relatives clauses ‘reference-establishing relative clauses’ (or ‘establishing relative’ for short) since they can establish a definite referent for the hearer without the need for previous mention. (Hawkins 1978 : 131)

私はこのような関係節を「指示を確立する関係節」（省略して「確立関係節」）と呼ぶことにする。というのも、このような関係節は、先行文脈での言及なしに。聞き手にとって定の指示対象を確立することができるからである。

(9) そして a. を次のように書き換えても同じ意味になることを指摘して、下のよう述べている。

d. What’s wrong with Bill? — Oh, he went out with **a woman** last night, and she/the woman was nasty to him. 「ビルはどうしたんだ」「ビルは昨日ある女性とデートしたんだけど、彼女が/その女性が彼にひどいことをしたんだ」

Thus, establishing relatives on a definite head NP are pragmatically equivalent to the corresponding indefinite sentences, and they contain, in effect, the sentences that would normally make anaphora possible on the basis of an introductory indefinite description. (Ibid. 133)

このように、定の先行詞を持つ確立関係節は、語用論的には対応する不定名詞句を含む文と等価である。そして実際にこれらの関係節は、先行文脈で指示対象を不定名詞句として導入していれば可能になる照応表現がある文を含んでいる。(注：「可能になる照応表現」と *the woman* のことである)

(10) さらに次の e. が適切でないことを指摘して以下のように述べている。

- e. What's wrong with Bill? — *Oh the woman who some sailor dated last night spread nasty rumors about Bill. 「ビルはどうしたんだ」「昨日どこかの船員がデートした女性がビルについてひどい噂を流したんだ」

It seems that an establishing relative clause must relate the new but definite entity, *the woman*, to a definite NP like *Bill*, rather than to an indefinite NP like *some sailor*. (...) we might conclude (...) that establishing relatives must relate the new, definite referent to some object about which speaker and hearer already share individual, specific knowledge, i. e. this already known object must be locatable in a previous discourse set of referents. (Ibid. 134)

確立関係節は、初めて登場したにもかかわらず定である指示対象 *the woman* を、*Bill* のような定の名詞句とリンクさせなくてはならず、*some sailor* のような不定の名詞句とリンクさせることはできないように思われる。(…) ここから次のように結論することができるかもしれない。確立関係節は、新規なのに定でマークされた指示対象を、話し手と聞き手がすでに個人的かつ明確な知識を共有している対象とリンクしなくてはならない。すなわち、この既知の指示対象は先行文脈が設定した指示対象の集合の中になくてはならないということである。

(11) 解説

Hawkins の問題提起は、a. のように聞き手にとって未知であり、初めて言及する対象になぜ定冠詞が使えるのかということにある。

- a. What's wrong with Bill? — Oh, **the** woman he went out with last night was nasty to him.
「ビルはどうしたんだ」「ビルが昨日デートした女性が彼にひどいことをしたんだ」

Hawkins の議論は次のように要約できる。

【要約】

a. で先行詞に定冠詞が使えるのは、関係節が先行詞の指示対象を、聞き手にとって既知のもの（ここでは *Bill*）と関係づけることによって、同定しやすくしているからである。a. のような関係節は、ふつうなら *a woman* → *the woman* のように、最初は不定名詞句として新しい指示対象を談話に導入するのと同じ役割を果たしている。

次のように考えるとよいかもしれない。確かに a. の *the woman* は聞き手にとって未知であり、初めて登場する話題である。しかし *the woman* が「昨日ビルがデートした女性」のように、既知の対象である *Bill* と関係づけられることで、聞き手にとって無理なく受け取

れるようになっている。つまり聞き手はほんとうの意味で「昨日ビルがデートした女性」を唯一的に同定することはできず、ビルが昨日デートしたことも知らないが、a.を聞いて「ビルは昨日デートしたんだ」と納得して、それならデートした相手の女性がいることも自然に受け入れる。

このように考えることで、次の b. と e.の定冠詞の使用が不適切であることを説明することができる。

b. What's wrong with Bill? — *Oh, **the woman who was from the south** was nasty to him.

「ビルはどうしたんだ」「南部から来た女性が彼にひどいことをしたんだ」

e. What's wrong with Bill? — *Oh **the woman who some sailor dated last night** spread nasty

rumors about Bill. 「ビルはどうしたんだ」「昨日どこかの船員がデートした女性がビルについてひどい噂を流したんだ」

a.の関係節 *who was from the south* には *the woman* をリンクできるような既知要素が何もない。また b.の関係節 *who some sailor dated last night* の主語 *some sailor* は不定名詞句で聞き手にとって未知の対象である。このように b. c. には *the woman* を関係づける要素がないために定冠詞の使用は不適切となるのである。

(12) さらに考察を進める。

上にまとめたように、*The woman he went out with last night was nasty to him.* では *the woman* が聞き手にとって既知要素である *he (=Bill)* と関係づけられることによって同定を助けていると言える。しかし、「同定」(identification) という操作を厳密に解釈すると、それは「提示された対象が知っているものと同じであると認定すること」ということである。問題の例では *he (=Bill)* と関係づけられることで *the woman* の理解は助けられているとはいっても、聞き手にとって未知の対象であることに変わりはなく、ほんとうの意味で同定できるわけではない。Hawkins はこのような場合の定冠詞の使用条件を、「既知のものと関係づける」とだけ述べているが、それでは不十分である。

(13) 前提の調節

話し手と聞き手の間のコミュニケーションとは、話し手による聞き手の前提の更新だと考えることができる。話し手は、聞き手が知っていることをもとにして、聞き手が知らないことを伝える。受け取った聞き手は新しい情報を自分の前提に付け加える。ある時点 t_1 における聞き手の前提集合を $\{P\}$ とし、話し手が伝えた新しい情報を $\{\alpha\}$ とする。前提の更新とは次の操作である。

$$\{P\} \rightarrow \{P + \alpha\}$$

ところが聞き手にとって新しい情報であるにもかかわらず、話し手がそれを前提の一部として伝えたとき、一定の条件のもとで前提の更新が起きることがある。Lewis (1979)はこれを「前提の調節」と呼んでいる。

Accommodation of presupposition

“If at time t something is said that requires presupposition P to be acceptable, and if P is not presupposed just before t , then - *ceteris paribus* and within certain limits - presupposition P comes into existence at t .”

(Lewis, D., “Scorekeeping in a language game”, *Journal of Philosophical Logic* 8, 1979)

ある時点 t において、受け入れるためには前提 P が必要な何かが言われ、かつ t 以前に P が前提となっていないとき、他の条件が同じで、また一定の範囲内であれば、前提 P は時点 t において存在するとみなされる。

【解説】

Lewis の言うことを日本語の対話で確認してみよう。次の対話は自然である。A は田中に子供がいることを知らなかったとする。

A: 田中さんは今日お休みなんですか。

B: ええ、子供さんが病気らしいです。

A: ああそうなんですか。

A は田中に子供がいることを知らないので、B の発話の「子供」は A の前提集合には含まれていない。ところが「子供が病気らしい」は「子供」の存在を前提としており、その前提を必要とする発話である。田中さんがある年齢より上の人だとすると、子供がいてもおかしくない。だから A は「田中さんに子供がいる」という前提を受け入れて、それを自分の前提集合に付け加えることによって B の発話を理解する。これが前提の調節である。これは見方によっては「前提の押しつけ」と見なすこともできる。

ただしこのような前提の調節ができるのは常識的な範囲内である。子供がいるのはふつうのことだが、ライオンを飼っているのはふつうではないので、A は B の発話に含まれる前提を受け入れない。

A: 田中さんは今日お休みなんですか。

B: ええ、飼っているライオンが病気らしいです。

A: えっ！ 田中さんライオンを飼っているんですか。

(14) まとめ

Hawkins が問題にする次の例における定冠詞の使用は、Lewis の言う前提の調節が適切に行われた例だと考えることができる。

a. What’s wrong with Bill? — Oh, the woman *he went out with last night* was nasty to him.

「ビルはどうしたんだ」「ビルが昨日デートした女性が彼にひどいことをしたんだ」

「ビルが昨晚デートした」ことも、「ビルが昨晚デートした女性」も聞き手にとって新情報であり、この時点で聞き手の前提集合の中にはない。しかし a. で定冠詞を用いることができるためには「ビルが昨晚デートした女性」は聞き手の前提集合の中になくてはならない。そこで聞き手は Lewis の言う「前提の調節」を行って「ビルが昨晚デートした女性」を自分の前提集合に付け加える。関係節は *the woman* を聞き手の前提にすでに含まれている対象 *he (=Bill)* と関係づけることによって、この前提の調節を助けている。

(15) 制限節・非制限節と前提の関係のまとめと総括

従来から特に根拠を示すことなく、「制限節は前提を表し、非制限節は断定を表す」と言われてきた。しかし河野や Hale や Hooper & Thompson らの研究を見ると、この俗説はまちがいであることがわかる。ほんとうは次のように考えるのが正しい。

- ① 先行詞に定冠詞の付く制限節は前提を表す。制限節の内容は、先行詞が指す指示対象の中から聞き手が適切な対象を選ぶ手助けをする。
- ② 先行詞に不定冠詞の付く制限節は断定を表す。制限節の内容は、先行詞が指す指示対象の属性を表し、その談話内への導入を手助けする。
- ③ 非制限節は断定を表す。ただし、非制限節のなかにも付随的な情報を付加するものと、主節と変わらないほど重要な断定を表すものがある。
- ④ 先行詞に定冠詞の付く制限節の内容は前提であるが、その内容を聞き手があらかじめ知っている必要はない。一定の範囲内ならば、聞き手は前提の調節を行ない、たとえ新情報であってもそれを自分の前提集合に付け加える。

8. 奇妙な振舞いをする制限節

(1) すでに見たように、制限的關係節は先行詞を修飾限定することによって、その外延を狭める働きがある。

a. *Les passagers qui ont été blessés ont été transportés à l'hôpital en hélicoptère.*

負傷した乗客はヘリコプターで病院に搬送された。

この例では乗客が全員負傷したのではない。關係節 *qui ont été blessés* は「負傷した乗客」と「負傷しなかった乗客」を分けて先行詞 *les passagers* の外延を狭めている。ところが次のような例ではそうではない。

b. *Les Danois ont été les premiers Européens qui aient mis les pieds en Amérique.*

デンマーク人はアメリカに上陸した最初のヨーロッパ人だ。

(『フランス語法辞典』大修館書店、1975)

c. *Il est le seul dans la classe qui pourrait répondre à toutes les questions en trente minutes.*

30 分間ですべての質問に答えられるのはクラスで彼ひとりだ。(同書)

b. では *les premiers Européens* 「最初のヨーロッパ人」を關係節が限定修飾して、「アメリカに上陸した最初のヨーロッパ人」と「アメリカに上陸しなかった最初のヨーロッパ人」とに分けているのではない。c. では先行詞 *le seul dans la classe* 「クラスでただひとりの人」を關係節が「30 分間ですべての質問に答えられるクラスでただひとりの人」と「30 分間ですべての質問に答えられないクラスでただひとりの人」に分けているわけではない。この關係節はふつうの制限節とどこがちがうのだろうか。

(2) McCawley, James, D., “The syntax and semantics of English relative clauses”, *Lingua* 53, 1981 ではこのように奇妙な振る舞いをする關係節を *pseudo-relative* 「擬似關係節」と呼んでいる。しかしこの呼び名は他の構文にも使われていて紛らわしいのでここでは採用しない。

McCawley が着目するのは次の 2 つの例文におけるイタリックの部分の意味のちがいである。

a. *Many Americans who like opera listen to the Met radio broadcast.*

オペラ好きのたくさんアメリカ人がメトロポリタンラジオ局の放送を聴く。

b There are *many Americans who like opera*.

アメリカ人の中にはオペラが好きな人が多い。

注) Met radio : Metropolitan Opera Radio オペラを放送する専門ラジオ局
フランス語でも同じである。

c. *Beaucoup d'Américains qui aiment l'opéra écoutent les émissions du Met radio.*

d. *Il y a beaucoup d'Américains qui aiment l'opéra.*

a. と b. には次のようなちがいがあある。アメリカ合衆国の人口は約 3 億 2 千万人だが、わかりやすいように 3 億人とする。すると b. は「3 億人の中にオペラ好きが多い」を意味し、たとえば 1 億人がオペラ好きであれば「多い」と言える。一方、a. が意味しているのは「オペラ好きな 1 億人のアメリカ人のうち多くの人メットラジオの放送を聴く」であり、たとえば 6 千人が聴けば正しいことになる。つまり数量詞 *many* が何を対象としているかがちがう。b. では *many* のかかる対象は 3 億人のアメリカ人全部だが、a. では「アメリカ人のうちでオペラが好きな 1 億人」である。

(3) 数量詞とそれが走る領域

many のような数量詞 (量化子) が対象とする集合を、「数量詞が走る領域」と呼ぶ。a. では *many* の走る領域は (the) *Americans who like opera* 「オペラ好きなアメリカ人」で、b. の *many* の領域は *Americans* 「アメリカ人全部」である。図式化すると次のようになる。[] が *many* が走る領域を表す。

a. *many* [*Americans who like opera*]

b. *many* [*Americans*] *who like opera*

この図式を見ると、a. では [*Americans who like opera*] が一つの塊 (構成素) となっていて切れ目がないが、b. では [*Americans*] と残りの *who like opera* は一つの塊ではなく、間に切れ目があることがわかる。つまり a. では *many* の量化の作用が全体に及んでいるが、b. では *Americans* だけが *many* の作用域である。

実際にそうであることは次の例文からわかる。ふつうの関係節では先行詞と関係代名詞の間に *as you know* 「君も知っているように」のような挿入句を入れることができない。

c. **Tom cooked a dish, as you know, that I always enjoy, (McCawley, op. cit.)*

君も知っているように、トムはいつも私がおいしく食べる料理を作った。

d. ?*Tom cooked twice-cooked pork, as you know, which I always enjoy. (Ibid.)*

君も知っているようにトムは二度焼きした豚料理を作ったんだが、その料理はいつも私がおいしく食べている。

ところがここで問題にしているタイプの関係節では挿入句を挟むことができる。

e. *There are many Americans, as you know, who distrust politicians. (Ibid.)*

君も知っているように政治家を信用しないアメリカ人はたくさんいる。

挿入句を挟むことができるということは、先行詞 (*Americans*) と関係節 (*who distrust politicians*) の間に切れ目があるということの意味している。

フランス語でも同じである。f. はふつうの関係節、g. はここで問題にしている構文。

f. **Tom a préparé un plat, comme tu sais, dont je me régale toujours.*

g. Il y a beaucoup d'Américains, comme tu sais, qui aiment l'opéra.

(4) 問題はこのような特殊な性質を持つ関係節がどのような統語的環境に生じるかということである。McCawley (1981)もこの点についてはあまり明らかにしていない。there 構文だけでなく、次のような場合にも生じるとしている。

a. Paul has a brother who lives in Toledo. (McCawley, *op. cit.*)

ポールにはトレドに住んでいる兄弟がいる。

b. Nixon is the only President who ever resigned. (Ibid.)

ニクソンは辞任したただ一人の大統領だ。

c. I've never met an American who doesn't like pizza. (Ibid.)

ピザが嫌いなアメリカ人には会ったことがない。

McCawley は次のように述べるに留まる。

"... I conjecture that pseudo-relatives are restricted to VP-final position in existential and negative existential clauses." (McCawley 1981 : 107)

擬似関係節は、存在文か存在の否定文の動詞句の最後の位置に限定されるのではないかと私は推測している。

【解説】

There are many Americans who like opera. は存在文である。(4) a. は there 構文ではないが所有動詞 have を用いて存在を表しているので、意味的にはとても近い親戚である。また(4) b. は No President other than Nixon ever resigned. 「ニクソン以外に辞任した大統領はいない」のように存在を否定する文に書き換えることができる。(4) c. も「会ったことがない」というのは「いない」と存在を否定しているのと同じである。つまりこのような関係節は存在文とその親戚の構文のみに生じるということになる。

このために使える動詞は have 以外に、see 「見る」、meet 「会う」、hear of 「聞いたことがある」、run into 「出くわす」のような動詞に限られるという。他の動詞だと次のようにふつうの制限的關係節になってしまう。

i) I've never had dinner with an American who likes opera.

私はオペラが好きなアメリカ人と夕食を共にしたことが一度もない。

(5) この節の最初に見たふつうの制限節とは考えられない例をもう一度見よう。

a. Les Danois ont été les premiers Européens qui aient mis les pieds en Amérique.

デンマーク人はアメリカに上陸した最初のヨーロッパ人だ。

(『フランス語法辞典』大修館書店、1975)

b. Il est le seul dans la classe qui pourrait répondre à toutes les questions en trente minutes.

30 分間ですべての質問に答えられるのはクラスで彼ひとりだ。(同書)

まず b. が「30 分間ですべての質問に答えられるのはクラスで彼以外にいない」のように存在の否定文に書き換えられるのは明らかである。

c. Il n'y a personne, sauf lui, qui puisse répondre à toutes les questions en trente minutes.

また a. も「デンマーク人より前にアメリカに上陸したヨーロッパ人はいない」のように書き換えることができる。

d. Il n'y a pas d'Européens qui ont mis les pieds en Amérique avant les Danois.

a.の les premiers や b.の le seul も一種の量子子とみなすと、次のように図式化できる。

f. les premiers [Européens] [qui aient mis les pieds en Amérique]

g. le seul [(élèves)] [qui pourrait répondre]

f.では les premiers が走る領域は[Européens]であるので、「ヨーロッパ人」の中で「アメリカに上陸した」という属性が成り立つ「最初の」と正しく意味を表現している。g.では領域として élèves を補うと、「生徒」の中で「30分で質問に全部答えられる」という属性を持つ「唯一の」と意味解釈することができる。

したがって、a. b.も McCawley が pseudo-relative と呼んだ特殊な関係節と同じものであることがわかる。

(6) 残された問題

ここで問題にした特殊な振舞いをする関係節についてのフランス語学の研究はとても少ない。ほぼ次のものに限られる。

古川直世「Il y a beaucoup d'Américains qui aiment l'opéra.型構文について」『フランス語学研究』30, 1996.

東郷雄二「フランス語の存在文と探索領域 — 意味解釈の文脈依存性と談話モデル」『会話フランス語コーパスによる談話構築・理解に関する意味論的研究』（科学研究費成果報告書）、2009. [東郷の HP から閲覧可能]

このタイプの関係節については次のような問題が未解決のまま残されている。

- ① なぜこのタイプの関係節は存在文とその類似構文に限定されるのだろうか。どうもこのタイプの関係節と「存在」という意味の間に特殊なつながりがあるようだ。
- ② McCawley がこのタイプの関係節は動詞句の最後に限られると述べているように、同じく存在を表しながら関係節が動詞句の最後の位置ではない次の文にはこの関係節は生じない。次の例はふつうの制限的關係節である。これはなぜだろうか。

Les livres qui ont traité de ce problème n'existent pas.

この問題を扱った本は存在しない。

- ③ このタイプの関係節も最終的には制限節か非制限節のどちらかの亜種と認定されるのだろうか。それとも制限節・非制限節という二大区分以外に、新しいタイプを認めるべきなのだろうか。

これらの問題は今後の課題とする。

